あ　い　さ　つ

年度末をひかえ，会員の先生方にはご多忙の日々をお過ごしのことと思います。また，日頃から本教育会振興のために，温かいご理解とご支援をいただいておりますこと，心からお礼申しあげます。

本研究会は，昨年度より研究主題を『未来を切り拓き，心豊かにたくましく生きる子どもの育成』とし，三好の子どもたちが，ふるさとの自然や人の温かさを大切にしながら，自分たちの未来を切り拓き，たくましく歩んでいく力を育成することをめざし研究を重ねております。

本年度は昼間幼稚園，三庄小学校，三好中学校に研究を深めていただき，その成果を平成２５年８月２２日の「三好教育研究発表会」でご発表いただきました。

○　豊かなこころをはぐくむ幼稚園教育
　～様々な体験活動を通じて，地域の人々や同年齢，
　　異年齢の子どもたちとふれあう交流活動～
　　昼間幼稚園　教諭　佐藤　重美

○　地域と共にある学校をめざして
　～地域の教育力を生かして育てる三庄っ子～
　　三庄小学校　教諭　三好　美智代

○　生徒一人ひとりの思いが尊重され，つながりを大切にする活動を通して
　　三好中学校　教諭　近藤　剛

学校は地域の人々との関わりや自然や文化とのふれあいによって「豊かな心」や「生きる力」をはぐくんできましたが，学校の統廃合，児童数の減少などによりその関わりが希薄化し，様々な課題が山積しています。こどもの体験の不足は，自ら考え判断するといった自主性･主体性のある行動に影響を及ぼしているともいわれています。子どもを取り巻く環境は年々厳しくなっていますが，変化する社会の中で学校・家庭・地域が連携することにより，共に支え合う地域づくりをめざしていかなければなりません。発表校の日々の取り組みは，家庭や地域とともに学校づくりを実践し，人々とのふれあいの中で豊かな感性を育てたり，体験を通した学びから人権意識を高めるすばらしい実践報告でした。発表校のご労苦に対しまして心から敬意と感謝を申しあげます。また，講演会は家庭教育プロデューサー　酒井勇介さんの「新教育時代における学校と家庭の役割とは」と題した講演でした。日々の積み重ねの大切さ・学力だけでなく道徳心を養うことの大切さなど，具体的でわかりやすい講演であり，好評をいただきました。この研究紀要は各学校１部ずつＣＤ化して配布させていただきます。園児・児童・生徒の学びの向上にご活用いただければ幸いです。

終わりになりましたが，本研究紀要発行にあたりご指導・ご助言いただきました先生方，研究協力校（園）および関係各位に心よりお礼申し上げますとともに，会員の先生方のますますのご活躍をお祈りいたします。

平成２６年３月

三好教育会長　新久保　由美子

目　　次

あいさつ　　三好教育会　会長　新久保　由美子

――――― 研究指定校研究 ―――――

■豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 ……1
～様々な体験活動を通じて，
地域の人々や同年齢，異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究～
昼間幼稚園　教諭　佐藤　重美

■地域とともにある学校をめざして ……10
～地域の教育力を生かして育てる三庄っ子～
三庄小学校　教諭　三好　美智代

■生徒一人ひとりの思いが尊重され，つながりを大切にする活動を通して ……21
三好中学校　教諭　近藤　　剛

――――― 教育研究所研究員研究 ―――――

■複式学級における指導の充実を目指して ……32
三好教育研究所　研究員　赤堀　誠司

■ＩＣＴ活用の推進と情報モラル教育 ……47
三好教育研究所　研究員　岡本　博一

■既刊『研究紀要』の内容一覧（過去１０年）……59

研究主題

豊かなこころをはぐくむ幼稚園教育

様々な体験活動を通じて，

地域の人々や同年齢，異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究

昼間幼稚園　教諭　佐藤重美

１　はじめに

本園は，東みよし町昼間にあり，周囲を田畑や山に囲まれた，自然豊かな環境のなかにある。昼間小学校にも隣接しており，日常的に交流している。保護者や地域の方の教育に対する関心は深く，たいへん協力的である。

今年度の園児数は，５歳児２０名である。戸外では，元気よく，自転車やストライダー乗りを楽しんだり，土手で虫探しをしたりする姿がよく見られる。室内では，体技台を活用して積極的に体を動かしたり，好きな曲でリズミカルに踊ったり，身近な素材を利用して作品づくりをするなど，明るくのびのびと園生活を送っている。

しかしながら，近年の少子化で年々園児数は，減少していることから，同年齢との人間関係の構築や，家庭での生活様式等の変化に伴い，幼児期の成長や発達に大切な体験や周りの人々と心を通わす機会が希薄化しているように感じられる。

２　研究の目的

人間関係と体験の薄まりに対して，本園では，平成５年度より定期的に近隣の幼稚園・保育所・保育園と連携し，積極的に地域に出かけたりしながら交流会を実施している。

幼稚園教育要領のなかで，「幼稚園では，生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して，人とかかわる力や，思考力，感性や表現する力などをはぐくみ，人間として，社会とかかわる人として，生きていくための基礎を培うことが大切である」と書かれている。そこで，

①豊かな感性を育くむために，近隣の幼稚園･保育所・保育園との交流活動をどのようにいかしていくか。

②人に親しみかかわろうとする力を高めていくために，保護者や地域の方をどのように組み入れていくか。

この２つを研究の目的とした。

３　実践の紹介

「田植え体験」「うどん打ち体験」「稲刈り体験」「おはなし会」「異年齢交流会」の５点に絞って，実践例を紹介する。「異年齢交流会」以外はいずれも足代幼稚園とともに活動している。

①田植え活動

毎年，地域の方のご協力で，足代幼稚園とともに田植え体験を行っている。今年も，６月に実施した。

どの子どもたちも，ほとんど田植えの経験がない。恐る恐る入った田んぼの感触に歓声をあげたり，自由がきかない足と格闘していた。しかしながら，ぬかるみに慣れるに伴って，苗の植え付けも手際よくなってきた。

そのうち，わざと転んでどろんこになったり，泥だんごを作ったりとダイナミックに遊ぶ姿もたくさん見られた。ある子は「ぬるぬるしたけどおもしろかった。」と，泥だらけの体でうれしそうに伝えて来た。

子どもたち自身が全身で感じ取る直接的活動を通じて，一緒に笑ったり，おもしろかったことを言葉で伝え合い，共感してくれるたくさんの友だちの存在があることを知る貴重な体験となっている。

園と家庭をつなぐ連絡帳から，保護者のお便りをご紹介する。

【田植えお疲れ様でした。久々に，足代の子どもたちに会えてうれしそうでした。田植えもそうですが，泥のなかに入ることがないので，とてもよい体験ができたと思います。】

②うどん打ち体験

７月に体験施設『増川笑楽耕』にて，足代幼稚園とともに，うどん打ち体験を行った。

温かいお迎えを受けながら到着し，早速，うどん打ちが始まった。子どもたちは，うどん生地を麺棒でのばしたり，たたんだり，切ったりすることは初めてだった。しかし，地域の方がやさしく手ほどきをしてくださったので，一生懸命に取り組んでいた。できばえには，みんな満足した様子であった。

ぶっかけうどんとして，昼食でいただいた。「めっちゃうまいなあ。」と互いに顔を見合わせながら，どんぶりいっぱいのうどんをあっという間に完食した。

昼食後は，みんなで近くの谷川で水遊びや沢ガニ探しなど行い，夏ならではの貴重な体験も出来た。

このことを通して，地域の人々に出会い，人の優しさにたくさんふれることができた。あたたかい言葉をかけてもらったことは，自分が見守られている安心感がうまれ，人への信頼感を育てると考えている。つまり，人に親しむ力，かかわる力となっているのである。

連絡帳を通しての，保護者の方のお便りである。

【昨日は，お世話になりました。うどんの作り方やうどんがうまかったこと，カニが一匹しかいなかったなど，たくさんお話してくれました。】

【「おうどんおいしかった。」と，とても喜んで帰ってきました。たくさん話をしてくれました。ありがとうございました。】

③稲刈り体験

「６月に植えた稲が実ったので，稲刈りに来てください。」と，連絡をいただき，稲刈りに出かけた。交流会も３回目となり，久しぶりに会えた足代幼稚園のお友達の名前を呼んで，再会を喜ぶ姿がたくさん見られた。

田んぼを管理してくださった地域の方に感謝し，稲刈りが始まった。最初は，鎌を持った経験もない子どもたちなので，力のいれ具合に戸惑いなかなかうまく刈れなかった。しかし，２回・３回と鎌を動かしコツを覚えると，スムーズに刈れるようになった。「まだまだ，やりたい。」と言って，たくさんの株を刈る子どもたちの姿も見られた。

地域の方や足代幼稚園の子どもたちとともに，刈り取った稲束を運び，天日干しをする作業にも進んで参加した。天日干しという共通の目的を見いだし，地域の方や友だちと一緒に力を合わせてやり遂げることで，充実感と達成感を味わうことがでた。

お世話をしてくださってた地域の方のお話を紹介する。

【どの子も上手に刈ったなあ。小さいうちに，土に親しむ経験が大切だと思っています。この頃は，自然の中で遊ぶことが少なくなっているように思うので，今日の体験が大きくなって，きっと役に立つと思います。みんなが喜んでくれるとこちらもうれしいです。】

④おはなし会

学期ごとに，地元ボランティアグループ『どんぐりの会』が主催する，おはなし会に参加している。１１月，東みよし町立図書館にて，『どんぐりの会』の方々による，大型絵本の読み聞かせや，パネルシアター・エプロンシアター等を使ったおはなし会に参加した。

読み聞かせの時間中，どの子どもたちも，一心不乱に聞き入っていた。おはなしが終わると，自然に拍手がおこり，どんぐりの会の方々に「ありがとう。」「おもしろかった。」と口々に伝えている姿が印象的であった。

おはなし会は，普段の読み聞かせとは違ったわくわくする体験である。友だちと一緒に，同じ世界を共有する楽しさを味わうことができた。

『どんぐりの会』のメンバーの方のお話である。

【今日は，大勢の子どもたちが来てくれ，おはなしを聞いてくれてとてもうれしかったです。図書館は昼間や足代から遠く，子どもたちだけでは来れないと思いますが，幼稚園の団体として利用することは，とてもてもいいことだと思います。

これを機会に，保護者の方へも図書館への関心の幅が広がってくれることを願っています。読書好きの子どもに育ってほしいと思います。】

⑤　異年齢交流会

本園は，２つの保育所・保育園から集団生活を経験した子どもたちが入園して来る。子どもたちの活動する環境が変わっても抵抗なく生活ができるよう，なめらかな接続をめざして，保育所・保育園４歳児と年３回交流会を行っている。

このことについて，３回目の１月の活動を紹介する。

幼稚園の子どもたちは，１２月に小学校１年生の活動として「あきまつり」に招待してもらい，うれしかったことから，今回は，自分たちがお店屋さんやゲーム屋さんを開きたいと，意気込んでいた。小学生に招待された時に味わった楽しい経験を，今度は，自分たちが企画・運営したいという思いが生まれたのである。子どもたちは，何日も前から準備し，それぞれの店の役割を話合いで決め，交流会を楽しみに待っていた。

いよいよ『ようちえん　ふゆまつり』が始まった。カードを持って，店をまわる保育所・保育園の幼児たちに，「いらっしゃい，いらっしゃい。」と威勢のいい声をかけていた。やり方が分からなくて困っている幼児には，遊び方を伝えたりするなど，相手を思いやりながら活動した。そのうえ，自分の役割を途中で投げ出すこともなく，責任を持って最後まで活動した。保育園の幼児が，「全部いったよ。」と，シールを貼ったカードと袋いっぱいのプレゼントを

見せながら，にっこりと私達に伝えてきた。

異年齢交流会は，総勢７０人以上の子どもたちが活動する。子ども同士のやりとりを重ねることで，協調して遊ぶことの楽しさを知り，ひいては，社会のきまりを守ろうとする気持ちの育ちもはぐくむことができた。

保育所の保育士さんのお話を紹介する。

（たくさんの楽しいことを準備してくれて，ありがとうございます。私も子どもと一緒に楽しみました。保育所ではなかなかできない活動ですが，さすが，幼稚園さん。しっかりお店屋さんの役をこなしていて，頼もしく感じました。）

４　成果と課題

実践の成果については，次の５点となる。

①　足代幼稚園との交流を兼ねた，田植えや稲刈り・うどん打ちなどの体験活動は，さまざまな驚きや発見があり，普段の生活では味わえない貴重な体験や同年齢交流をすることができた。また，子どもたちから「足代の友だちに会えるんで。」と告げてくることも多く，一緒に活動するうれしさや楽しさをたくさん味わうことができた。

②　園外へ出かけ，地域の方とたくさん出会うことで，人の温かさを感じ，人に親しむ力やコミニュケーション力を育てることができた。

③　おはなし会に参加することで，物語への親しみが深くなり，図書館や本がより身近な存在となった。なかでも，さまざまな方が語りかけてくださるおはなしは，子どもたちの心にしみこみ，想像の世界

のなかで，さまざまな感動と気持ちを知り，豊かな心をはぐくむことができた。

④　異年齢交流では，目的に向かって，友だちとかかわりながら，主体的に遊びを組み立てていく姿がみられた。保育士の方に，成長した姿を認められたことで自信をつけ，さらに意欲的に園生活を送ることができるようにもなった。

⑤　大勢の子どもたちとのかかわりのなかで，きまりに気づき，きまりを守ろうとする道徳性や規範意識の芽生えを身に付けることができた。

今後の課題として，次の３点がある。

①　交流活動を通じて，子どもたち一人一人のなかに何をはぐくみたいのかを明確にし，個々の発達に応じたねらいが達成できたかをしっかりと捉えることを重要視していきたい。

②　交流活動を通じて，子どもの育ちを保護者や地域に伝え合い，成長をともに喜び合えるよう，つながりを深めていきたい。

③　さまざまな体験活動が，一過性のものでなく，子どもたちの主体的な遊びにとけ込み，心をはずませ表現し，仲間と感動を共有できること，つまり豊かな感性の育ちへ向けて，園の環境や保育計画を整えていきたい。

５　おわりに

幼稚園の教育の本質は，保育者が園児と信頼関係を築きあげることが基盤となる。そのうえで，園児一人一人が自分らしさを発揮できているか，自分の思いや願いを叶えることができているか，また，かけがえのない一人としてまわりから認められているかなどを，保育者がしっかりと見つめていかなければならない。

このことを決して見失わず，子どもたちが，楽しさやうれしさをひとつでも多く共有し，心を揺り動かす体験活動に，今後も取り組んでいきたい。

研究主題

地域とともにある学校をめざして

～地域の教育力を生かして育てる三庄っ子～

三庄小学校　教諭　三好美智代

１　はじめに

本校は現在，学級数７　児童数 162 名の中規模校である。子ども達は全体的に純朴かつ明朗であり，素直にのびのびと育っている。本校区は，三好郡東みよし町の南東部吉野川流域に位置し，かつては田畑の広がる農村地帯であったが，近年校区を東西に走る国道 192 号線沿いに各種店舗や病院が建ち並んだり，学校周辺には新築の家が増加したりとその姿は年々変わりつつある。学校付近には，「児童クラブ」「公民館」「町立図書館」「町立歴史民俗資料館」「三加茂陶芸クラブ」「いろり文庫」など地域の人々が活用できるいろいろな施設がある。また，子ども達をとりまく地域の人々の気持ちは大変温かく，様々な教育活動や児童の安全確保に積極的にかかわってくれている。

さて本校は，平成２４年度に「コミュニティ・スクール推進事業調査研究校」の指定を受けた。コミュニティ・スクールとは，家庭や地域とともに学校づくりを進める「学校運営協議会制度」のことである。コミュニティ・スクールに指定された学校には「学校運営協議会」が設置され，教育委員会から委員として任命された保護者や地域の代表が，一定の権限と責任をもって学校運営の基本方針を承認したり教育活動について意見を述べたりすることを通じて，学校の様々な課題解決に参画していく。全国では，平成２４年度末までに１５７０校，徳島県では６校が指定されている。また，東みよし町では今年度秋より「コミュニティ・スクール連携協議会」を立ち上げ，町内の小中学校が連携しあいながら進めていく予定となっている。このような流れの中，本校が取り組んだコミュニティ・スクール推進のための活動の一端を報告したい。

２　研究の目的

平成２４年度には１１名の委員からなる「コミュニティ・スクール推進委員会」を設置し，「地域の教育力を生かして育てる三庄っ子」をサブテーマに，学校運営協議会の組織や運営体制作りを進めるために，地域の人材をいかに活用し連携していけばよいかについて研究を進めることにした。

３　研究の方法

（１）　先進校視察

①　東みよし町ですでにコミュニティ・スクールとしての歩みを進めていた加茂小学校で，活動の様子をみせてもらった。加茂小学校では，子どもたちにつけたい力を具体的に描き，放課後も活用して様々な取り組みをしていた。

②　夏休みには，香川県の白山小学校を訪問して，「夏休みわくわく講座」の一部を見学させてもらった。白山小学校では，既存の各種団体を生かしたネットワークによって人材を確保し，地域の人の特技や専門性を生かした取り組みをしていた。

（２）　研修会への参加

文科省が主催する「地域とともにある学校づくり推進協議会」に参加した。文科省は平成２８年度までに約３０００校のコミュニティ・スクール設置をめざしており，全国各地で推進協議会を行っている。多種多様な課題をもつ先進校の取り組みの発表から，学校と地域が課題を共有して独自の活動を構築していくこと，地域にある教育資源を子ども達につないでいくこと，負担を軽減しながら効果をあげるために効率のよい連携の仕方を工夫していくことなどの視点をもつことができた。

（３）　講演会の実施

保護者や地域の人への啓発を図るために，兵庫教育大学大学院教授日渡円先生を講師に招き，コミュニティ・スクールの概要についての講演会を参観日に実施した。本年度６月東みよし町教育会総会の折りにも招き，町全体での研修を行った。「今日本は，３度目の大きな教育改革の時代に突入しており，個を伸ばす教育を進めている。学校運営協議会制度は，学校の自主性・自立性を伸ばすためのものである。一人ひとりの教員が自立し，地域とともに教育を支えるという意識をもって進むことが必要である。」とのことであった。

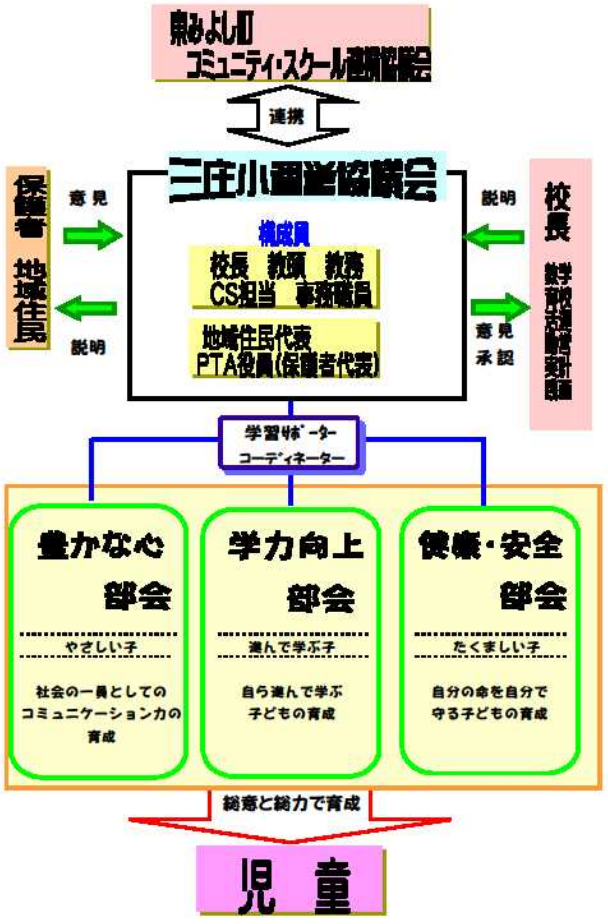
４　実践活動

平成２５年度は，１５名の委員からなる学校運営協議会を設置し，学力向上部会・豊かな心部会・健康安全部会の３部会をおいて，「進んで学ぶ子　やさしい子　たくましい子」の実現をめざすこととした。

学力向上部会では，ゲストティーチャー・出前授業・体験学習などを活用して学習への興味関心を引き出し，自ら進んで学ぶ子どもの育成をめざしている。豊かな心部会では，地域の人との交流のなかで，社会の一員としてのコミュニケーション力を身につけさせることをめざしている。健康安全部会では，心や体の健康づくりを通して，自分の命を自分で守れる子どもの育成をめざしている。

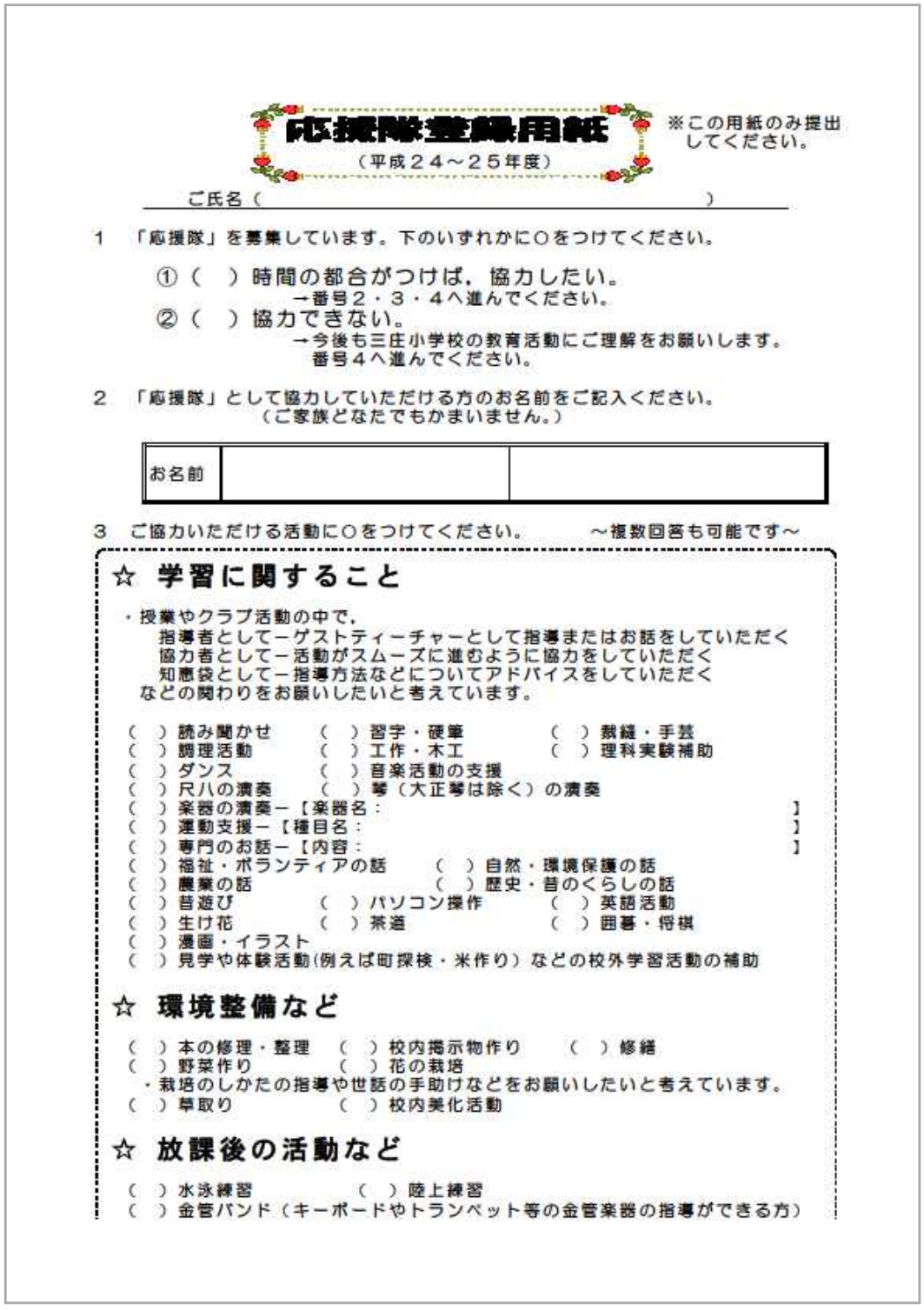
これらの活動には学校運営協議会委員も関わり，可能な限り教育活動に参加して評価することで教育活動の改善につなげている。

《　コミュニティ・スクール運営体制　》



（１）　応援隊募集

本校は，１１年前から始まった読み聞かせ活動を支えてくれる保護者，５年前から始まった「放課後子ども教室」を支えてくれる三寿会の皆さんを中心に，学校教育のために力をかしてくれる人がたくさんいるが，さらにその輪を広げるため，「三庄っ子応援隊」を募集した。募集にあたっては応援してもらいたい項目をあげ，三寿会・婦人会・三加茂手話サークルなどの団体や保護者を対象にした。応援隊バンクのメンバーには必要な時に連絡をして，具体的な活動内容について打ち合わせをしたうえで応援をしてもらうようにしている。



応援隊登録用紙
（平成２４～２５年度）

※この用紙のみ提出してください。

ご氏名（　　）

1　「応援隊」を募集しています。下のいずれかに○をつけてください。

①（　）時間の都合がつけば，協力したい。
→番号２・３・４へ進んでください。

②（　）協力できない。
→今後も三庄小学校の教育活動にご理解をお願いします。
番号４へ進んでください。

2　「応援隊」として協力していただける方のお名前をご記入ください。
（ご家族どなたでもかまいません。）

お名前		

3　ご協力いただける活動に○をつけてください。　～複数回答も可能です～

☆ 学習に関すること

・授業やクラブ活動の中で，
指導者として－ゲストティーチャーとして指導またはお話をしていただく
協力者として－活動がスムーズに進むように協力をしていただく
知恵袋として－指導方法などについてアドバイスをしていただく
などの関わりをお願いしたいと考えています。

（　）読み聞かせ　（　）習字・硬筆　（　）裁縫・手芸
（　）調理活動　（　）工作・木工　（　）理科実験補助
（　）ダンス　（　）音楽活動の支援
（　）尺八の演奏　（　）琴（大正琴は除く）の演奏
（　）楽器の演奏－【楽器名：　　】
（　）運動支援－【種目名：　　】
（　）専門のお話－【内容：　　】
（　）福祉・ボランティアの話　（　）自然・環境保護の話
（　）農業の話　（　）歴史・昔のくらしの話
（　）昔遊び　（　）パソコン操作　（　）英語活動
（　）生け花　（　）茶道　（　）囲碁・将棋
（　）漫画・イラスト
（　）見学や体験活動(例えば町探検・米作り）などの校外学習活動の補助

☆ 環境整備など

（　）本の修理・整理　（　）校内掲示物作り　（　）修繕
（　）野菜作り　（　）花の栽培
・栽培のしかたの指導や世話の手助けなどをお願いしたいと考えています。
（　）草取り　（　）校内美化活動

☆ 放課後の活動など

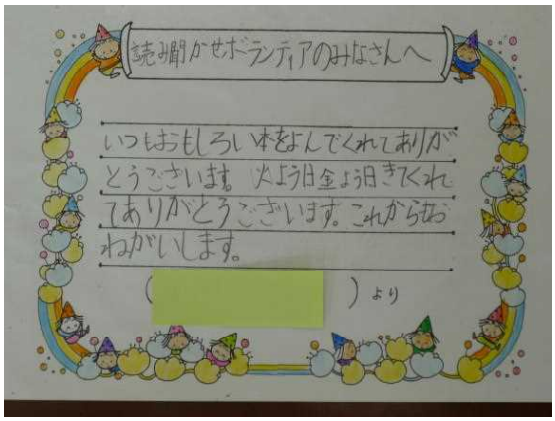
（　）水泳練習　（　）陸上練習
（　）金管バンド（キーボードやトランペット等の金管楽器の指導ができる方）

（２）　学力向上部会の取り組み

①　読み聞かせ活動

毎週火曜日と金曜日の朝，ボランティア１０名と６年生児童が輪番制で，全学年の教室で行っている。

学校の図書室にある「読み聞かせ文庫」にはたくさんの本があり，子ども達は読み聞かせをとても楽しみにしている。七夕集会やクリスマス会でも，恒例のプログラムの１つになっている。



②　教科指導の中で

【　国　語　】

１年生－出前授業：鉛筆の持ち方

５・６年生－出前授業：ＮＩＥ

５・６年生－出前授業：俳句教室
学校運営協議会委員さんも参加して
一緒に活動

【　社　会　】

３年生－歴史民族資料館探検：昔の道具調べ

【　生活科　】

１年生－芋苗植え・芋掘り体験

１年生－昔の遊びをしよう

１・２年生－いろり文庫探検

地域の人が自宅を解放してくれている「いろり文庫」にはたくさんの本があり，いろりを囲んで読書を楽しむことができるようになっている。１・２年生が探検に行った時には，炭火であられをいってくれた。放課後に足を運び，本の世界に浸っている子どももたくさんいる。

【　音　楽　】

６年生－芸術家派遣事業

文理大学のバリトン歌手の先生の指導を受けた。素晴らしい歌声は子ども達の心に響き，卒業式の歌の練習への意欲も高めることができた。

【　図　工　】

４年生－陶芸教室
三加茂陶芸クラブ会員の指導

３～６年生－元校長先生による絵画指導

【　体　育　】

３・４年生－阿波踊りの練習

阿波踊り連に所属している保護者の指導運動会当日は，お囃子の演奏もしてもらった。

【　家庭科　】

５年生－ぼたもち作り
婦人会の人と一緒に

６年生－じゃがいも料理
保護者と一緒に

③　総合的な学習の中で

５年生「イッツ　ワンダフルライフ　生命誕生プロジェクト」の単元の中で

山口谷川
お魚救出大作戦

田植えにゴー

稲刈りにゴー

もちつき体験

「命の学習」　～ 赤ちゃんが誕生するまで～

半田病院の看護士さんの話

産前休暇中の前年度担任の先生からの話

疑似体験で妊婦さんになって

④　クラブ活動

おもしろ英語・工作クラブ

手話・点字クラブ：東みよし町祭りでの発表

⑤　放課後の活動の中で

【　金管バンド　】

昼間小学校の校長先生の指導

基礎練習のチェック・楽器の演奏の仕方・曲の演奏のポイントなどについてきめ細やかに指導してもらった。子ども達の緊張感が高まり，意気込みに変化が見られた。

【　夏休みの講座　】　　地域の経験者の人による指導

習字大好き講座

チャレンジそろばん講座

（３）　豊かな心部会の取り組み

①　育ちっ子タイム

月１回第４金曜日の放課後，１・２年生を対象に行っている。活動内容は，婦人会や三寿会の人が考えてくれていて，メンバーが交代できてくれる。今までに行った活動は，童謡と詩吟のコラボ・おやつ作り・ゲーム・工作・お茶会・カンフー体操。

②　放課後子ども教室

月２回第１・第３木曜日の放課後，１～３年生を対象に行っている。約３０名の三寿会の人が５班に分かれて，輪番制で担当してくれている。これもメンバーが活動内容を考えてくれていて，いろいろな遊びやゲーム・工作などをしている。

③　人権教育舞踏劇の鑑賞

四国大学との連携で，大学生による「人権舞踊劇」を鑑賞した。

④　心の学習

自分を見つめる機会をもち，自己肯定感を高めるために，３・４・６年生がスクールカウンセラーによる心の授業を受け，コミュニケーションの仕方や自分の心を知るための学習をした。

（４）　健康・安全部会の取り組み

①　陸上練習

夏休みから９月にかけての練習期間中，地域の人に陸上種目の指導を受けている。各種目の動きの特性や練習方法などを教えてくれる。また，卒業生が応援に来てくれることもあり，子ども達の励みになっている。

②　ブラッシング指導

三好保健所の歯科衛生士さんに，全校児童が発達段階に応じた指導を受けた。口の中の様子やむし歯のでき方について話を聞いたりクイズに答えたりしながら歯に関する知識を楽しく学び，磨き方を練習した。

③　熱中症予防講演会

大塚製薬の人を招き，熱中症予防についてのお話を保護者や地域の人と一緒に聞いた。

④　ＡＥＤ講習会

６年生と教職員・保護者が参加して，東消防署の人に指導を受けた。

⑤　交通安全教室

三好警察署・町交通安全指導員・クロネコヤマトの協力を得て行った。

また，スクールガードの人には登下校の安全の見守りをしてもらっている。

⑥　オープンスクールの日の避難訓練

オープンスクールの日に地震を想定した避難訓練を行い，その様子を保護者に見てもらった。

（５）　コミュニティ・スクールだよりの発行

コミュニティ・スクールだよりを通して活動を伝え，啓発を図っている。２５年度は，それをＨＰにも掲載している。

平成２５年度

三庄小　コミュニティ・スクールだより(1)

コミュニティ・スクールになりました

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）は，学校の運営に保護者や地域のみなさんの声を生かし，地域に開かれ地域に支えられる学校づくりをする仕組みです。平成２５年４月から，三庄小学校は「学校運営協議会」を設置することによって，コミュニティ・スクールになりました。

第１回　学校運営協議会

《　運営協議会委員　》

松浦　章人	学校医	松浦　明人	保護者代表
武田カネ子	三寿会代表	西川　高行	保護者代表
福下　憲八	三寿会代表	藤原　優	保護者代表
元木理津子	婦人会代表	藤本　順子	読み聞かせボランティア代表
		三木　潤子	読み聞かせボランティア代表

５月２９日に，第１回学校運営協議会が開催されました。

東みよし町教育委員会から学校運営協議会委員が委嘱されました。その後，校長から学校運営方針の説明があり，担当から１年間の教育活動と運営委員会の部会組織や活動についての説明があり，協議を行いました。

三庄小学校のコミュニティ・スクールは地域・家庭・学校の代表で組織される「豊かな心部会」「学力向上部会」「健康・安全部会」の３部会で活動を進め，「やさしい子・進んで学ぶ子・たくましい子」の育成を目指していきます。運営体制は裏面をご覧ください。

また，東みよし町では，「コミュニティ・スクール連携協議会」を設立し，町全体での取り組みを進めていくこととなっています。三庄小学校からも代表が参加し，一緒に歩みを進めていくことになります。

《主な協議内容》
- ○学校経営方針について
- ○学校運営協議会の運営について
- ○学校教育活動支援の具体的方策・課題について
  - ・「育ちっ子」タイムの活動の継続。放課後子ども教室との連携。
  - ・読み聞かせ活動の継続。外部講師・応援隊の活用。サマースクールの工夫。
  - ・多様な事態を想定した避難訓練の実施。
  - ・給食等を教材にした食育の推進。
  - ・アレルギーについて児童への啓発を。

５　成果と課題

（１）　成　果

①　地域の教育資源の発掘

活動を通して，学校や子ども達にかかわっていきたいと思っている人やいろいろな特技を持った人が地域にはたくさんいることが分かった。また，既存の各団体と連携することにより，その会長がコーディネーター役として計画や運営をまとめてくれたので，活動がスムーズに進んだ。

②　地域の活性化

子どもにかかわることで，「子ども達の新たな一面を発見した」「子ども達に元気をもらった」などの思いをもち，地域の人が子ども達と交流することを楽しみにしてくれていることが分かった。さらに，子ども達の成長を願ってしている活動が，保護者や地域の人自身の喜びや成長にもつながっていることが伺えた。

③　教育効果を高める

ゲストティーチャー・出前授業・体験学習などを通して，専門的な知識や高い技術にふれることで，子ども達は感動をえたり身近な人のよさを再発見したりすることができた。また，学習に対する興味や関心を高め，より深くより広い学習に導いていくために有効だということが分かった。

④　交流によって結ばれる強いつながり

子ども達は，地域の人のきめ細かなサポートや優しい気配りに触れることで，人の温かさや学習が多くの人の支えによって成り立っていることに気付き，感謝の気持ちをもつことができた。また，挨拶や言葉遣いなどについて改めて考える機会にもなった。そのことが，学校の仲間との絆を強くすることにもつながっていくと思っている。さらに，地域に子ども達のことをよく知ってくれている人が増えると，学校以外の場所や卒業後も，子ども達の安心につながっていくと考える。

⑤　開かれた学校づくり

保護者や地域の人が教育活動にかかわる機会を増やしていくことにより，子どもや学校の様子がこれまで以上に伝わっている。「先生も　大変やな。」との声は，「一緒に何かできることがあれば。」という思いや新たな活動につながっていくと考える。

（２）　今後の課題

①　意識の温度差の解消

コミュニティ・スクールについての理解は少しずつ進んでいるが，まだ全体に浸透しているとは言い難く，受け止め方にも温度差が見られる。思いを共有して取り組みを進めるために，情報発信のしかたや企画の工夫，応援隊のメンバーどうしのネットワーク作りなどの必要があると考える。

②　熟議を重ねるための方策

教育活動については各アンケートなどによって意見をもらっているが，それを活動に反映させていくために，資料の提示のしかたを工夫するなどして話し合いの活発化を図り，具体的な提案を引き出す工夫が必要であると考える。

③　持続可能な活動を進めるための方策

コミュニティ・スクール運営の将来的なビジョンを示し，成果が確認できて無理なく進められる活動を続ける工夫が必要であると考える。仕事をもつ保護者にとっては思うように参加できない実情もあり，保護者の積極的な参画を促すための調整が難しい。

④　町の連携協議会の有効な活用

東みよし町は，「コミュニティ・スクール連携協議会」設立によって町全体で人材バンクを共有化し，コミュニティ・スクールの推進に取り組む方向で進んでいる。今後，それぞれの学校が抱えている課題を共有し，町内６校で方策を出し合ってよりよい方向に進めていくことが期待されている。その中の１校として，有効に連携していくための努力を続けたい。

６　終わりに

今までの取り組みを通して，コミュニティ・スクールとしての活動の効果が少しずつ見えてきた。今後は，さらに有効に機能するコミュニティ・スクールにするために研究を重ねていきたい。

研究主題

生徒一人ひとりの思いが尊重され，つながりを大切にする活動を通して

三好中学校　教諭　近　藤　　剛

１　はじめに

本校は，徳島県西部，吉野川上流域にある全校生徒165名の小規模校である。東みよし町は2006年に，旧三好町と旧三加茂町が合併して誕生した。人口は約１万５千人，総面積122.55㎢で面積の約8割を山林が占める緑豊かな町である。ただ，生徒数は2009年に200名を切り，毎年減少の一途をたどっている。保護者や地域の人々はＰＴＡ活動やコミュニティスクール活動，学校行事などに積極的に参加し，協力的である。また，生徒たちも明るく素直である。しかし，人権学習の授業や人権集会においては，自分の思いを伝えることができない生徒もいた。そこで，生徒たちが本音で語り合い，互いを認め合える仲間づくりをすることによって，自尊感情を高めて豊かな人間関係をつくることをめざし，学習を積み重ねている。

２　生徒の実態・現状

本校では，人権教育を推進するために，日常の教育活動が正常に機能していることが必要不可欠であると考え，「あいさつをきちんとする」「他人の話をよく聞く」「落書きをしない」「提出物をきちんと出す」「掃除は時間いっぱいする」「学習を最後までがんばる」など，当たり前のことが当たり前にできるように指導を徹底している。こうした教育活動がおこなえるのも，保護者や地域の方々が教育に関心が高く，協力的であることが要因の一つといえる。また，生徒会活動などにおいても，生徒たちに任せられる場面を多く設定し，自主的な活動を進めている。

生徒たちは地域に支えられながら小集団の中で大切に育てられており，素直で明朗である。まじめで決められたことはきちんとしようとし，思いやりもある。また，校内外で気持ちのよいあいさつができる生徒も多い。しかし，自分で考えて主体的に行動することや自分の思いや考えを伝え合いながら人間関係を築いたり，意見を深めたりしていくことは苦手な傾向にある。

本校では生活記録「清明」があり，毎日担任が目をとおしている。生徒は日々の取組や思いなどを枠いっぱいに書き，きちんと提出することができる。また，日常生活の中で気になることや，悩み事はないかを把握するために，毎月１回「ふれ愛メール」を実施している。家庭との連携を深めるために，各学年による「学年通信」，学期ごとに「ＰＴＡ新聞」を発行している。その中に，人権に関する話題や書物，行事について積極的に取り上げるようにしている。さらに各教室や各学年の廊下には生徒の作文や作品を紹介するなど，人権に関する掲示物を充実させ，人権意識の高揚を

図っている。

３　本校の人権教育

（１）人権教育目標

基本的人権の尊重を基盤として，社会に現存する不合理や矛盾に気づき，あらゆる差別を解消しようとする強い意志と，実践力を身につけた人間の育成に努める。

（２）重点課題

① 人権を守り，差別を許さないという意識や自覚が，生徒たちの日常生活に根付き，日常生活の小さな問題も見逃さない鋭い感性をもった生徒の育成をめざす。

② 学習内容の充実や学習方法の工夫をおこない，共に考える姿勢を身につけ，積極的に発言できる表現力を育てる。

③ 大勢の前でも発言ができ，学級や学年の垣根を越えて意見を交換することで，よりよい人間関係や学校づくりに取り組む。

④ 家庭や地域と密接な連携を深めた人権教育を推進する。

⑤ 校種間を越えて互いの交流を深める。

４　実践

(1) 人権集会

人権集会は，基本的に人権委員会が企画運営している。年度初めの人権集会は７月の人権問題意見発表会の後に，２回目は９月の人権劇上演後におこなわれる。各学級の代表者による意見発表や人権劇の感想や日頃の人権学習で感じていることなどを語り合う。いきなり全校学習をおこなっても，意見が出にくい状況があった。そこで，一人ひとりが思いを伝えることができるように，まず学級での学習で，じっくり自分と向き合う時間をとり，ワークシートに自分の気持ちを綴ることで自分の考えを確認する。そして，書いたものを発表することから始めた。これにより，学級や学年での学習，さらには全校の人権集会の場で，互いに思いを少しずつ語ることができるようになっていった。

昨年度の２回目の集会では，人権劇『あやまちに気づいて』への感想や意見をもとに，各学年での人権学習の取組，自分なりの考えや思いを真剣に考え伝え合うことができた。思いが繋がり合うことで，自分のことをわかってもらいたいという思いがわき起こり，いじめを受けた時に，心の奥

に押さえ込んでいた苦しみを振り絞るように話す生徒も出てきた。

その思いを受け止め，「間違っていることは，きちんと相手に伝えて正すことが真の仲間だと思う」とか，「自分が口にする一言一言を大切にしたい」など，自分ができることは何かを考えようとする姿勢が見られた。このように，まわりの仲間の大切さ，普段発する言葉の重みについてもさらに話し合いが深まっていった。

この集会の後「次の集会はいつですか。もっとみんなの思いを知りたいし，私も伝え返したい」と伝えてくる生徒もおり，仲間を信頼して自分の思いを本音で語れたこと，そして自分の思いに共感し受け止めてもらえたことの喜びや充実感を体感し，生徒の中に安心して思いを伝え合う信頼関係が育っているのを感じた。

また過去には，卒業前の人権集会で，各学年の１年間の人権学習の取り組みや成果・課題などを報告する時間を設定してた。ここで，卒業生から後輩に，自分の中学校３年間で学んだこと，仲間への思い，三好中学校や地域の方への感謝などが自然と語られた。卒業生の温かくも熱い思いに触れた後輩からは，「先輩のように中学校生活を過ごしたい。」「高校へ行っても夢を実現出来るように頑張って欲しい。」など，先輩への尊敬と感謝の思いが返された。

○人権集会の生徒の感想

・今回の人権集会はたくさんの違った視点からの意見が聞けてよかったと思います。最初は意見がつながらず話し合いらしくはありませんでしたが，後半はうまくいったような気がします。この集会の中から，今，この世に存在できていることに感謝して，一瞬一瞬を大切に生きていかなければならないと思いました。また，仲間や家族の大切さをあらためて実感しました。

・普段発する言葉についてもたくさんの人の意見がありました。そして，三好中の伝統である，あいさつや言葉遣いのことについても改めて考えることができました。私が冗談で言ったつもりでも，相手は傷ついてしまっているかもしれません。また，「おはよう」や「ありがとう」などの一言があることによって，誤解や問題がこじれなくてすむということもあります。これからは，人のよいところを探していけるようにしていきたいです。

○卒業生の意見

・高校へ行くと今までいっしょに過ごしてきた仲間とも離ればなれになる。だからこそ，あらためて中学時代の友達や，みんなとつながっていくことがよかったなあと思うときがある。だから，みんなが真剣に思いを伝え合う人権集会の場を大切にしていってほしい。そして，三好中学校をもっともっとよくしていってほしい。

（２）人権講演会

「うたや人，識字から学ぶ人権～イメージやメッセージから人権について学びましょう～」という演題で，阿南市福井小学校湯浅先生を迎えて講演会をおこなった。人権コンサート形式の講演は初めてという生徒がほとんどで，歌や話の内容に集中して聞き入っていた。本校における，人権に関するアンケートも事前におこなっていて，それを元にした話もしてくださり，生徒たちはより身近な問題としてとらえることができた。子どもと保護者が一緒に参加できるように，授業参観の後で実施した。

○生徒の感想

・僕が１番印象に残っている歌は「青空」です。その歌のサビから，生まれた場所や見た目で人間を決めつけてしまうことは間違っているというメッセージが伝わってきました。今回の講演会で，身近には様々なメッセージソングがあることを知り，また勝手に物事を決めつけ，固定観念をもってしまうことが差別につながるということを学びました。

・差別によって，文字を奪われていた人が識字学級で学び，初めて字が書けたとき，本当にうれしかったと思います。その話を聞いたとき，差別で苦しんだ人たちの痛みがわかる人になりたいと強く思いました。

○保護者の感想

・講師の先生は，ギターを弾きながら，何曲も歌ってくださり，その曲からどのようなメッセージがあるのか話されました。人権問題という難しいテーマではありますが，難しい言葉だけの講演ではなく，先生のすばらしい歌声と熱いメッセージは，生徒や保護者の心に響き，深く刻まれたことと思います。

また，「人権について考えましょう」という演題で２・３年生を対象にして，徳島市の教育集会所主事をされている，弘瀬さんに講演をいただいた。生徒は自分たちに近い世代の人の講演ということで親しみやすく，人柄にも引き込まれていっていた。また様々な人権問題や，私たちが日頃抱えている悩みについてなど，クイズ形式で考えていくことができ，身近なものとしてとらえることができた。さらに結婚差別について，実際にあったいくつかの事例をもとに話をされ，特に印象に残ったという生徒がたくさんいた。

○生徒の感想

・講演の初めには，人権問題や私たちの人権意識に対するクイズがありました。そこで，知らず知らずのうちに人を傷つけたり，偏見をもってしまったりしていることはないか，考えさせられました。また，結婚差別についてもいくつかの事例をもとに話をしてくださったのでわかりやすく，私たちがこれまで学習してきたことの理解をより深めることができました。

・私は将来絶対に，自分の愛する人と結婚したいです。もし，周りに反対されたとしても，認めてもらえるまでがんばりたいです。そして子どもができたら，その子にも好きな人と結婚してもらいたいです。最後に，「世界中で自分は１人しかいないし，みんな同じ人なんていないから，大切にしなければいけない。」という話を聞いて，自分も自分の周りにいるみんなも同じように大切にしていかなければいけないと思いました。

東みよし町教育委員会の協力もあり，人権コンサートは毎年おこなわれている。2012 年度は「夢をあきらめないで～絶望とひきこもりを乗り越えた先にあるもの～」という演題で，ESPERANZA（エスペランサ）さんが，2013 年度は「ちょっと心をかしてくれませんか」という演題で，ヒューマンバンド「熱と光」さんにお越しいただいた。心に染み渡る演奏や，力強いメッセージのこもった歌声に生徒達

は熱心に聴き入っていた。

（３）教職員研修

人権教育を学校教育活動全体を通じて実践し，人権感覚を磨き，生徒たちの人権を大切に守っていく教職員集団をめざして研修を積み重ねている。定期的に，全体でまたは学年団で，人権教育の進め方や資料選び，情報交換などをおこなっている。例えば，「"あわ"人権学習ハンドブック」を活用したり，「人権教育の指導方法等の在り方について［第３次とりまとめ］」の内容を確認し合ったり，差別落書きやネット上の差別書き込みなどの県内における現状や対処法について共通理解を深めたりした。もちろん，人権講演会には全教職員が参加し，意見や感想の共有をし，意識を高め合っている。情報と人権という観点から「インターネット・携帯電話等のフィルタリング普及啓発セミナー」を実施した。インターネットや携帯電話の世界は，教師が知らない世界として済ませるのではなく，本校でも使用率が増加傾向にある今，早急に対処していかなければならない問題としてとらえている。また，本校スクールカウンセラーが教職員を対象にした，東日本大震災における緊急派遣活動の様子や現状報告をもとにして，研修に取り組んだ。さらに，徳島県教育委員会人権教育課指導主事の板垣先生による「人権教育の進め方」や，徳島県発達障害者総合支援センター「ハナミズキ」相談員の遠藤先生による「発達障害について研修会」で共通理解を図ったり，考えを深めたりした。

（４）小・中・高の連携

①小・中の連携

本校は２つの小学校区からなる。懇談会をもうけて人権教育年間計画の情報交換や，意見交換をおこなっている。その中で，人権学習の内容や進度なども検討したり，生徒の実態を話し合ったりして連携を図っているが，まだ十分とはいえない。今後，小学校間，そして小・中学校間の連携をより深めていくことが，課題である。

また，連携の一つとして，本校の人権劇を小学校で上演をした。中学生は自分の母校ということもあって，普段以上に熱演し，小学生も自分たちの知っている先輩たちが一生懸命演じている

姿を真剣に見入っていた。小学生には人権劇の感想と，中学校に対する質問を書いてもらった。中学生はその感想を読んで，小学生に思いが伝わっていたことや，前向きな意見にとても感動していた。中学校に対する質問には，部活動や専門委員会についてや，勉強への取組方や生活について，また，あいさつや礼儀についてなどがあった。それらの答えを人権委員が中心になって考え，模造紙にまとめて小学校に掲示をお願いした。

２月には，校区内の小学校６年生を本校に招いて交流会を実施している。中学校生活を知り，心にとめておくことで，中１ギャップを少しでも解消できるのではないかということが目的である。本校の生徒会や人権委員による学校の生活や取組の紹介や人権劇の上演，中学１年生との交流をおこなっている。

②中・高の連携

定期的な高校だよりや，高校説明会をとおして伝わる先輩たちの生き生きと活動している姿は，中学生にとってよい励みになっている。人権学習の授業研究会では人権教育主事どうしで意見交換もおこなっている。

辻高等学校人権部や三好高等学校 SH サークル（人権部）と交流をおこなった。内容は，様々な人権問題についての思いやそれぞれの取組について話し合うものだった。生徒にとっても新たな発見や，興味深いものもあり，互いの活動を見つめ直し深めるよい場であるので，今後も定期的におこなっていきたいと考えている。

（５）人権劇

本校の人権劇は，1996年から続いており，今年で17年目を迎える伝統あるものである。人権劇を作るにあたって「自らの心を見つめること」「様々な人権問題を自分の問題としてとらえること」「仲間とともに考え，行動していく機会となるように」といった，学習にとって大切な思いも同時に受け継がれている。

毎年，人権劇の制作から上演は，人権委員会の重要な仕事になっている。「人権劇をしたい」「人

権について学習し，たくさんの人に伝えたい」と毎年人権委員を希望する生徒も多い。また，人権劇に尽力したいという有志として参加する生徒もいる。

主に発表の場は，９月の吉野祭（学校祭）や10月の東みよし町人権フェスタの２回となっている。特に，人権フェスタは，本校だけでなく他校や婦人会の人権劇，また小学生の意見発表もあり，互いに人権意識を高め合える場になっている。２度の発表を毎年楽しみにしてくださっている保護者や地域の方々も多く，本校にとっての啓発活動の一環も担っている。

人権劇のテーマは，生徒の実態に合ったものを取り上げたり，学習を進めている人権問題や人権作文の内容を参考にしたりしている。これまでのテーマは，ハンセン病問題やいじめ，携帯電話のトラブル，障害者問題などいろいろである。昨年度は『あやまちに気づいて』というタイトルで，インターネットによるいじめの問題をテーマに取り上げて上演した。

これは，本校の保健調査のアンケートから携帯電話や通信機器の所持率が中学２年生の女子の段階で一気に増加しつつあることや，６月の人権集会で「インターネットによるトラブル」について生徒の中から問題提起があったことがきっかけとなって，制作することとなった。シナリオは，毎年，主に３年生の人権委員を中心に聞き取りやフィールドワーク，関連する資料やビデオなどをもとに意見を出し合い作り上げていっている。

制作の過程で，生徒は悩んだり，恥ずかしくて声が小さくなったりし，自分の思いが表現できない。また，なかなか仕事がはかどらず意見が対立したり，やる気を見失いかけたりする子もいる。しかし，夏休みのほとんどを劇練習に明け暮れるうちに，生徒の気持ちが少しずつ変わっていく。役者はもちろん，裏方である大道具や効果音・照明係と生徒たちは大忙しである。多くの時間を共有するその過程で，頑張れる自分・伸びている自分を，そして仲間とのつながりを実感していくのである。

このように，人権劇によって生徒の心に直接的に人権問題を問いかける機会を得たことで，生徒はその思いを周りの人たちと共有したいという思いにいたる。また，一方で，なかなか，ありのままの自分に目を向けられない生徒がいるのも事実で，だからこそ本音で語り合える場，人権集会が効果的になってくるのである。

三好中学校　人権劇　〈過去10年分〉

年度	タイトル・内容	テーマ
２００４ 年度	『熱いハートを伝えたい』 大阪市，川口泰司さんからの聞き取り学習	同和問題
２００５ 年度	『気づけてよかった祖母の人権』 人権問題意見発表会　生徒作品より	高齢者
２００６ 年度	『笑顔で迎える未来(あす)をめざして』 江口　いと　さんの講演会を受けて	同和問題
２００７ 年度	『希望の光をめざして』 国立ハンセン病療養所大島青松園のフィールドワークにて，松浦　徳男さんから学んだこと	ハンセン病回復者に対する人権問題
２００８ 年度	『希望を抱いて　未来への一歩 ～介助犬とともに～』 介助犬ユーザー 川上　和彦さんの生き方	障害者
２００９ 年度	『ケータイの向こう側』 情報モラルについて考える	インターネットと人権
２０１０ 年度	『過去から未来へと』 国立ハンセン病療養所大島青松園のフィールドワークにて，松浦　徳男さんの生き方について	ハンセン病回復者に対する人権問題
２０１１ 年度	『明るい明日のために』 人権問題意見発表会での生徒発表や，資料をもとにして	いじめ
２０１２ 年度	『あやまちに気づいて』 人権問題意見発表会・人権集会での，生徒発表をもとにして	インターネットによる いじめ
２０１３ 年度	『絆～明日への架け橋～』 三好中学校のハンセン病回復者に対する人権問題の学習のあゆみについて	ハンセン病回復者に対する人権問題

○人権劇の感想（中学生） ・今回の人権劇を見て，一人に対してたくさんの人が悪口を言っている場面が一番印象に残りました。それは，小学時代に同じようなことがあり，過去の自分たちを見ているようでした。しかし，今は違います。目の前にいじめられている人がいたら，勇気をふりしぼってそれをやめさせようと思います。 ・いじめをテーマにした劇で，今まで経験してきたことも含め，身近に感じることがたくさんあった。いじめを見ても，今度は自分がいじめられるかと思って止められなかったけど，これからは変えていきたい。それに，間違っていることは間違っていると言える自分でありたいし，そのような考えの仲間を増やしていきたい。 ・今年の夏休み，暑い中みんなで協力して人権劇に取り組むことができました。劇をとおして，人権の大切さはもちろん，理解し行動することの大切さも学びました。劇を無事終えたときにはとても感動し，多くの人たちに思いを伝えることができて本当によかったです。
○人権劇の感想（小学生） ・いじめは初め遊び半分でやっていても，だんだんエスカレートしていくものだと感じました。いじめはどこの学校やクラスでも起こるかもしれない問題です。だからいじめのない，仲よく楽しい学校生活がおくれように，みんなの気持ちを考えていけたらと思いました。 ・中学生の人権劇を見て，いじめがいけないことで，どれだけ人をどん底につき落とすかということにあらためて気づきました。また，自分がなにげなく言った言葉が相手を傷つけていないかふりかえるきっかけにもなりました。もし，いじめが起こったら，やめさせるために注意していきたいと思いました。

（６）ハンセン病に関する人権学習

もう一つ，本校の人権学習の軸として，ハンセン病患者の方の人権について継続した学習をおこなっている。この学習の目的の一つは，生徒一人ひとりに物事を正しく判断する力を育てることである。二つ目は，人権意識を高め，学びを深める場としての役割がある。ハンセン病についての学習をとおして，ハンセン病に対する正しい知識を身につけ，曖昧な知識や周りの偏った情報などに惑わされずに物事を正しく判断し，差別や偏見をなくしていこうとする意欲や態度を育てたいと考えている。

そのため，２年生で大島青松園を実際に訪問して回復者の方々からお話をお聞きする機会を取っている。回復者の方との交流から，生徒は，いかに偏見や差別が人権を踏みにじるものであるかを実感する。また，いまだに「ふるさとに帰れない・本名を名乗れない」回復者の方の現実に憤りを覚え，偏見や差別をなくしていこうとする意欲や態度が芽生える機会にもなっている。

また，阿波市民劇団「千の舞い座」による「千の舞い～ふるさとへ帰りたい～」という題の，ハンセン病問題に関する人権劇を，全校生徒で観劇した。さらに，徳島県ハンセン病支援協会会長の十川さんに講演もしていただいた。保護者や地域の方々にも参加をよびかけて，子どもと大人が人権問題を共に学ぶよい機会となった。

昨年度 11 月に開催された三好郡・市人権教育研究大会では，２年生はハンセン病患者の人権に関する授業を公開した。事前の校内研究授業では，「黒川温泉宿泊拒否事件」を教材に授業をおこなった。そして当日は，「命尊し～本名を名乗る意味～」を教材として授業をおこなった。２年生は学年学習という形で実施し，それぞれのクラスで話し合ったことをさらに全体で発表したり，意見を交換したりすることができ，活発な授業となった。そして，ハンセン病を正しく理解し，偏見や差別をなくしよりよい社会をつくるための一歩を，みんなで踏み出すことができたのではないかと思う。

５　成果と課題

伝統的に続いている人権劇は，人権問題や差別について真剣に考える機会になり，上演後の人権集会は全校生徒が互いの思いや意見を交換する場になっている。人権学習や人権集会で学び得たことをその時間だけで終わらせるのではなく，それを具現化させるために人権学習以外の学習や常時活動にも関連性を持たせた指導をすることが大切である。それが差別解消への態度化・行動化に結びつくものと考えている。人権集会にも課題はある。意見はよく出るが，つながりや深まりが少ないことである。しかしながら，徐々にではあるが学年での人権集会を重ねるごとに，生徒相互の意見につながりや広がりが出てきて，深まりのある話し合いとなるきざしはある。このことは，さらに充実した人権教育に変わっていくものと考えているので，これからも積極的に取り組んでいきたい。また，差別の現実から学ぶということで毎年，大島青松園を訪問し，フィールドワークや県人会の方と交流をおこなっている。今後は，それをより効果的に実施できるよう計画をしていきたい。また，さらに多くの人権問題について講演を聞く機会や，関係機関との連携をとり，交流を深めていけたらと考えている。そして，異校種間の情報交換や交流も進め，地域や他の学校とつながり協力できる環境づくりをめざしていきたい。

人権学習を進めてきて，生徒の意識や言動にも変化が見られるようにもなってきた。生徒の日常の会話でも，「こういう言い方はまちがっとるよなあ。」とか「次の集会では，もっと自分の意見を言えるようにしたい。」という言葉が聞かれるようにもなった。生徒の変化に気づき，それを大事にしていけたらと思う。次は，12 月におこなわれた生徒会役員選挙でのある生徒の演説である。

> 皆さん，三好中学校の伝統とは何だと思いますか。「あいさつ」「礼儀正しさ」「当たり前のことを当たり前にできること」など，おそらくそんな答えが浮かんできたのではないでしょうか。もちろん，そのようなことも大切だと思います。ですが，三好中学校に僕たち

の新たな伝統をつくりあげていくというのはどうでしょうか。僕が考えていることは，みんなが人権について考えていく環境をつくっていくことです。なぜなら，僕が学年での人権学習の時間でハンセン病について学習したときに，正しい知識や多くの意見・考え方を共有し深めていくことができたら，もっと一人ひとりの人権に対する意識が高まっていくと思ったからです。このような機会を大切にし，三好中学校に根付かせていったら，もっと学校がよくなると思っています。・・・

以上のように，人権劇や人権集会の取組を通して，それまで他人の意見に対して無関心であったり，なかなか自分の思いを伝えることができなかった生徒の心に，自分の思いを受け止めてもらえる安心感や信頼感が育まれ，感動や達成感を共有することで集団としての結束力が生まれた。

教職員も，このような学習の積み重ねが，「自分の大切さとともに他の人の大切さ」を認め支え合える仲間づくりにつながっていくと感じた。

本校には，集団に適応しにくい生徒や海外からの転校生・特別な支援の必要な生徒など，様々な生徒がいる。そのような事情をもつ生徒たちの人権も尊重される集団になるためにも，今後は，教育活動全体を通して，これまでに培った人権意識や温かい信頼関係をもとに，生徒が自ら考え実践していく行動力の育成に積極的に取り組んでいきたい。

最後に，今年度の人権問題意見発表会での一人の生徒の発表を紹介する。

僕が日本に来たのは 5 年生の時です。…今，勉強をがんばっています。もっと日本のことを知りたいし，みんなに追いつきたいです。勉強がわかると，もっともっと生活が楽しくなるからです。…わからない言葉は友だちが教えてくれます。困っている時も，友だちが助けてくれます。サッカー部にも入りました。…たくさんの友だち・優しい先輩・先生・家族・みんなに支えられて，ここ日本で，三好中学校で，楽しい毎日を送っています。…みなさん，これからもどうぞよろしくお願いします。

研究主題

複式学級における指導の充実を目指して

三好教育研究所　研究員　赤堀誠司

１　はじめに

今日，過疎化少子化の流れの中で，極少人数学級・複式学級が急増している。

三好郡・市内においても，平成２５年度小学校２２校中８校が複式学級での教育活動を行っている。また，教育課程の編成上，いくつかの教科で複式の授業を実施している学校が多くある。現在複式学級を有しない学校においても，児童の減少は著しく，今後も郡・市内における極少人数学級・複式学級の数は年々増えていくと考えられる。

極少人数学級・複式学級の増加に伴い，教育課程・学習指導において多くの課題と困難に直面している。私たち教師が複式授業の手腕を向上させることは，現在そして今後の重要な課題である。少人数・複式であることのメリットとデメリットを明確にし，不利な部分を克服し，有利な部分を最大限生かすことができるよう，授業や学級経営の工夫を図っていかなくてはならない。これまでの実践を継承しつつ，新しい時代の教育課題に対応していくことが大切であると考え本研究主題を設定した。

２　少人数性と複式学級

（１）　少人数性の特徴

長所

ア　人数が少ないため，一人ひとりに目がよく届き，個々の児童生徒の個性や能力に応じた指導ができる。

イ　学校生活上のつまずきをすばやくとらえ，個に応じた適切で継続的な指導ができる。

ウ　家族的な雰囲気の中で，精神的に安定した学校生活ができる。

エ　学級や学校の様々な役を体験させることができ，多様な活動場面で，誰でも主役として輝かせることができる。

短所

ア　相互交流の相手が限定されるので，生活経験や学習経験が豊かにならず，発展性に乏しい傾向を持つ。

イ　家族的な雰囲気が，なれ合いで妥協的になりやすく，節度ある態度やきびきびした態度などが育ちにくい。

ウ　望ましい人数のグループやチームを編成できず，ゲーム・話し合い・討議などの面での展開が難しい。

エ　個別化された動きはよくできるが，大きな集団での社会的経験の場と機会が不足しがちになる。

（２） 複式学級の特徴

長所

ア　上学年と下学年を交互に体験することになるので，よきリーダーとよきフォロアーの立場が経験できる。

イ　上学年の児童にとって，前年度に学習したことを復習することができる。

短所

ア　学級編成基準により２つの学年で構成される学級であることから，個人（能力）差と学年差が生じる。　（学習経験だけでなく生活経験においても１年間の差がある。）

イ　一人の指導者が２学年同時に指導することから，指導計画によっては，学習指導過程を工夫しなければならない。

３　複式学習における学習過程の「ずらし」

（1） 「ずらし」とは

複式学級の学習指導において，学年別指導を効率よく進めるために，教科や学習内容に応じて両学年の学習段階をずらして組合わせ，「直接指導」「間接指導」によって学習を行う方法で，これを「ずらし」という。

(2)授業時間内での「ずらし」(パターンA)

段階	A学年の学習活動	わたり		B学年の学習活動	段階
課題把握	○前時の学習を想起する。 ○課題をつかむ。 ○解決のための見通しをもつ。 （結果の予想，解決の方法等）	直接指導	間接指導	○前時の学習のまとめを利用して，練習問題や応用問題・発展問題に取り組む。 ○本時の学習への意欲につながる疑問や課題をもつ。	適応発展
課題追求	○一人で解決に取り組む。 ○ペアまたはグループで確かめ合う。 ○自分の考えを書き留めておく。	間接指導	直接指導	○課題をつかむ。 ○解決のための見通しをもつ。 （結果の予想，解決の方法等）	課題把握
定着	○解決の過程と結果を発表する。 ○それぞれの考えを意見交換し，自分の考えを見直す。	直接指導	間接指導	○一人で解決に取り組む。 ○ペアまたはグループで確かめ合う。 ○自分の考えを書き留めておく。	課題追求
適応発展	○まとめた結果をを利用して，練習問題や応用問題・発展問題に取り組む。 ○次時の学習への意欲につながる疑問や課題をもつ。	間接指導	直接指導	○解決の過程と結果を発表する。 ○それぞれの考えを意見交換し，自分の考えを見直す。	定着
まとめ	○本時のまとめをし，次時への学習意欲を高める。	直接指導	直接指導	○本時のまとめをし，次時への学習意欲を高める。	まとめ

これが，一般的なずらしのパターンである。

教師のわたりは、学習活動ごとに両学年を行き来する形をとっている。問題把握の学習活動と課題追究した後の解決（発表）の学習活動に教師が立ち会えるようにずらしを工夫したパターンである。

他にもいくつかの「ずらし」のパターンが考えられる。

（パターンＢ）

Ａ 学 年			Ｂ 学 年
課題把握			課題把握
課題追求			課題追求
定　　着			定　　着
適応発展			適応発展
ま と め			ま と め

両学年が同じ流れのパターンである。

学習内容が多い単元や課題追求にたくさんの時間をとりたい授業の場合に有効である。

学習活動をずらすのではなく，両学年ともに課題把握から始める。

（パターンＣ）

Ａ 学 年			Ｂ 学 年
課題把握			課題把握
課題追求			課題追求
定　　着			
適応発展			
ま と め			ま と め

片方の学年最初に指示を与えるのみで，その後は直接指導を行わないパターンである。

教師が児童とともに操作活動を行う場合や細かな指示を出しながら授業を進めなければならない場合に有効である。

片方の学年が課題追求に時間を要する場合や評価テストを行う場合に実施できる。

（パターンＤ）

Ａ 学 年			Ｂ 学 年
課題把握			適応発展
課題追求			課題把握
定　　着			課題追求
適応発展			定　　着
ま と め			ま と め

両学年の指導に軽重をつけたパターンである。片方の学年の学習内容が難しい場合や細かな指示を出しながら授業を進めなければならない場合に有効である。

（パターンＥ）

Ａ 学 年			Ｂ 学 年
課題把握			課題把握
課題追求			課題追求
定　　着			定　　着
適応発展			適応発展
ま と め			ま と め

両学年の間を行ったり来たりする（「小わたり」をする）パターンである。

児童が本時の学習の流れを明確に理解できている場合や学習リーダーの誘導で授業が展開できる場合に有効である。

（３） 単元全体の「ずらし」

単元全体をずらすことにより，両学年の単元の導入場面が重ならず，児童・教師いずれも，ゆとりをもって学習を進めることができる

A学年	単元の導入			単元のまとめ
B学年	単元の導入		単元のまとめ	

（４） 留意事項

・児童の学習活動が途切れないように全校体制で学び方を育てていく。
・学年別指導を効率的に行えるよう学習内容の系統性を踏まえ，単元の配列を工夫する。
・教えるだけに終始せず，教える部分と考えさせる部分を整理し，要点を押さえた直接指導をする。
・画一的な時間配分ではなく，ねらいや児童の実態を踏まえ，学習の充実感がもてるように直接指導・間接指導の組み合わせ方，及び時間配分を検討していく。

４ 複式学習における「わたり」のタイミング

（１） 「わたり」とは

複式学級の学習指導において，一人の教師が２つの学年の学習を成立させるために，１単位時間の学習過程の中で直接指導と間接指導のバランスを取りながら，両方の学年を交互に移動して指導を行う教師の動きで，これを「わたり」という。

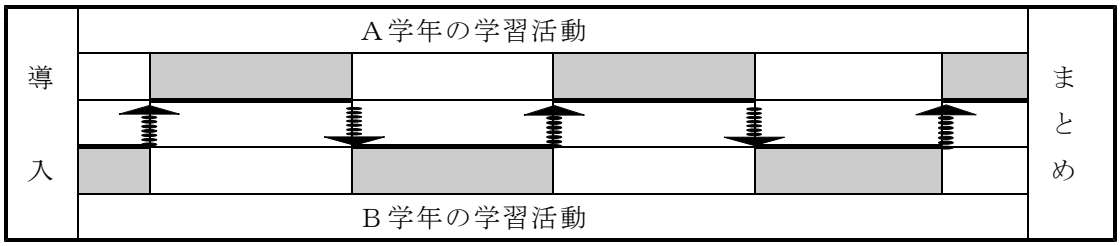
（２） 「わたり」を効果的かつ効率的に行うために

直接指導によって扱う必要がある内容は何か，どの内容を間接指導に委ねるかについて，教材の特質や児童の実態などから検討し，以下に示すことを考慮しながら予め計画を立てておく。

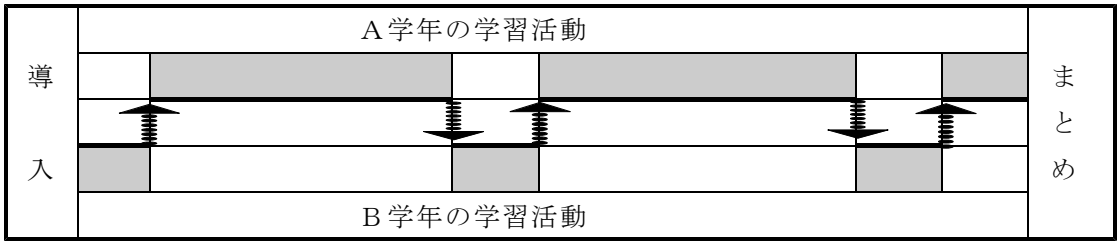
① 「わたり」のパターン

学習過程での学年別の指導内容やその指導の方法によって決まってくるが，授業展開の中で大まかには次のパターンが考えられる。

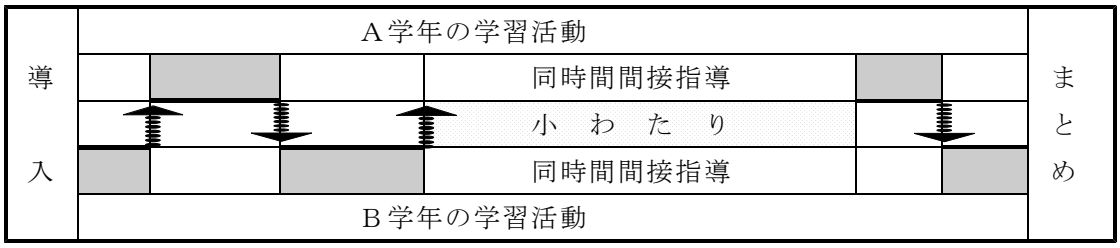
ア 両学年にほぼ同じ割合で直接指導を行う



イ　一方の学年に重点を置いて直接指導を行う



ウ　同時間間接指導を取り入れ「小わたり」を行う



②　「わたり」の目的

○教師が直接かかわり，指導しなければならないことがある。

○教師が子どもの様子を直接捉え，評価しなければならない。

○子どもが自力解決できる場面にあり，直接指導を必要としない。

③「わたり」の判断

学習活動が展開している中，時間や学習内容の区切りで機械的に「わたり」を行っても，その効果は期待できるものではない。あくまでも「わたり」を行うときの判断基準は子どもの状態にあることを意識することが大事である。

ア　間接指導から直接指導への「わたり」

【わたる必要があるかどうかの判断ポイント】

○自力解決した内容を修正する必要がある

○自力解決した内容を焦点化する必要がある

○自力解決した内容以外の考えに目を向けさせる必要がある

○自力解決した内容を深化・発展させる必要がある

○自力解決の行き詰まりやつまずきを救う必要がある

イ　直接指導から間接指導への「わたり」

【わたってよいかどうかの判断ポイント】

○課題に対して自力で解決できる力や手立てがあるか

○解決の見通しを持っているか

○つまずいたときの手立てをもっているか

ウ　同時間接指導での「小わたり」

直接指導と間接指導の間に同時間接指導を取り入れて「小わたり」を行い，子ども一人一人の学習活動の状態をより的確に把握する方法も有効である。

５　複式学習における「リーダー学習」

（１）　「リーダー」の役割

学習を自主的・効率的に進めるには，「ガイド」の育成が重要である。しかし，「ガイド」の育成には時間がかかり，十分なガイド学習の定着は難しい。そこで，「リーダー学習」が多くの現場で取り入れられている。「リーダー学習」における「リーダー」は，主として間接指導時での進行役という側面が強い。

（２）　「リーダー学習」の意義

ア　児童生徒の自主的・主体的な学習態度の育成

イ　児童生徒への学習の流れ（学習過程）の理解

ウ　児童生徒の学び方（自己学習力）の定着

エ　教師の学習指導へのゆとりと充実

オ　教師の指導観・授業観の改善

カ　複式の間接指導の充実

キ　リーダー、フォロアーの役割や立場の理解

（３）　「リーダー学習」定着のための条件

学習リーダーによる授業を効果的に行うには、児童生徒に学習の主体者であるという自覚を持たせることが大切である。そのために、 学習をするのは自分たちであり、自分たちの手で授業を進め、自分たちの手で課題を解決するという意欲を高めることが重要となる。

６　パソコンを活用した間接指導

（１）　研究内容

複式授業を効果的に実施する方法について，述べてきたが，今回の研究の柱は，間接指導の際に，児童がいかに主体的に学習に取り組めるかということである。

間接指導においては，課題追求と適応発展に割く時間が多いが，児童が主体となって話し合いを行ったり，定着を図る活動に取り組むことができないかと考えた。そこで，パソコンとモニターを利用して，児童自らがガイドを中心として学習に取り組む過程を検討した。

自分が一昨年度経験した３・４年生の複式学級において，特に苦労したのが算数科であった。そこで，３・４年の算数科でパワーポイントでクリックを繰り返すことにより学習を進められる教材を作成した。それを，複式授業のいくつかのパターンに沿って利用する方法を紹介する。

（２）授業方法

ア　パターンＡの授業

最も一般的な，パターンＡのずらしの授業である。単元は，３年「一億までの数」，４年「折れ線グラフ」で授業展開を考えてみた。どちらの学年でも，課題追求の後の定着の段階において，パソコンを使った学習を取り入れている。パワーポイントの最終画面もいくつか紹介するが，実際には，クリックするごとに学習の定着が図れるように工夫して作成している。

第３・４学年（複式）算数科学習指導案

1　単元名

３　年　「一億までの数」　　４　年　「折れ線グラフ」

2　単元の目標

３　　年	４　　年
一億までの数のよみ方，かき方，しくみを理解する。10 倍，100 倍や 10 でわることについて理解する。千万の位までの数の相対的な見方にもとづく加減計算を理解する。	折れ線グラフのよみ方やかき方を理解する。

3　単元の評価基準

３　　年	４　　年
ア【関心・意欲・態度】 一億までの数のしくみについて関心をもち，位取り記憶法のよさがわかる。 イ【数学的な考え方】 一万の位までの位取りと同じしくみで一億の位までのしくみを説明できる。千万の位までの数の相対的な見方にもとづく加減計算の仕方を考える。 ウ【技能】 数のしくみに着目して，一億までの数をよんだりかいたりできる。 エ【知識・理解】 一億までの数のしくみ，よみ方，かき方が理解できる。	ア【関心・意欲・態度】 折れ線グラフに表すよさをいかして，進んで折れ線グラフに表したり，身の回りにある折れ線グラフを活用しようとする。 イ【数学的な考え方】 変化の様子がよくわかるグラフにつくりかえるための方法を考えたり，変化の特徴を傾きから考えたりすることができる。 ウ【技能】 折れ線グラフをよんだりかいたりすることができる エ【知識・理解】 折れ線グラフの特徴がわかる。

4 指導計画

３　年　（全９時間）	評価内容	４　年　（全６時間）	評価内容
①千万の位までの数のよみ方とかき方（２時間）〈本時２／２時間〉	ア・イ ウ	①折れ線グラフのよみ方（３時間）	ア・ウ エ
②一億までの数のしくみ　（１時間）	イ・エ		
③大きな数の大小　（１時間）	イ・ウ	②折れ線グラフのかき方（２時間）〈本時１／２〉	ア・イ ウ
④大きな数のたし算とひき算（１時間）	イ・エ		
⑤１０倍した数　（１時間）	イ・ウ	③たしかめと復習（１時間）	ウ・エ
⑥１００倍した数　（１時間）	イ・ウ		
⑦１０でわった数　（１時間）	イ・ウ		
⑥たしかめと復習　（１時間）	ア・エ		

5　本時の学習

（1）目　標

３　　年	４　　年
千万の位までの数のよみ方，かき方について理解する。（b）	省略の印を使って，変わり方の様子をよくわかる折れ線グラフに工夫して表す。（b）

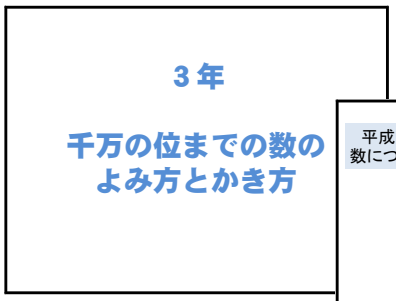
（2）展　開

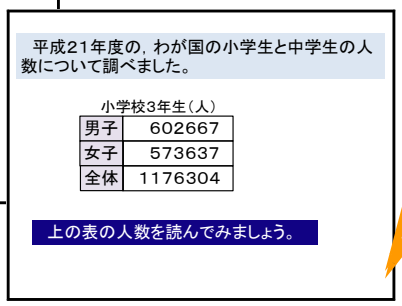
３　　年		わたり		４　　年	
指導・支援	主な学習活動			主な学習活動	指導・支援
● 一万の位よりも大きな数が出てきたことに着目させる。	①平成２１年度の小学校３年生の人数を見て気づいたことを発表する。		10	①「はるなさんの体温」の折れ線グラフをかく。 ワークシート	●前時の学習を想起させながら，問題に取り組ませる。
●根拠をはっきりさせて記入するように助言する。	②男子の人数のよみ方を考え，ワークシートにまとめる。 ワークシート	17		②かきあげた折れ線グラフを見て，気づいたことを発表する。 パソコン・モニター	●折れ線グラフを提示して，モニターを指しながら発表させる。 ■（評価イ）
●ワークシートをモニターに提示して発表させる。 ■（評価イ）	③自分の考えを発表する。 実物投影機 モニター		22	③グラフをどう工夫すればよいかワークシートにまとめる。	●根拠をはっきりさせて記入するように助言する。
●パソコンの問題に説明を加えながら答えるようにさせる。	④千万の位までの数のしくみを理解する。 パソコン・モニター		30	④省く印を使って，グラフをかく。 パソコン・モニター ワークシート	●パソコンで省く印の意味と使用法を確認させる。
●４けたずつで区切ってよむことをパソコンを操作しながら説明させる。	⑤説明を加えながら千万のくらいまでの数をよんだり，かいたりする。 パソコン・モニター	35		⑤最初にかいたグラフと比較し気づいたことを発表する。	●気づいたことを発表させ，変わり方の様子がよくわかることをおさえる。
●個人差に配慮しながら一人一人が自信を高められるように配慮する ■（評価ウ）	⑥練習問題をし，理解を深める。 プリント	42		⑥練習問題をし，理解を深める。 プリント	●個人差に配慮しながら一人ひとりが自信を高められるように配慮する。■（評価ウ）
●次時への学習意欲を高める。	⑦本時のまとめをし，次時の課題をつかむ。		45	⑦本時のまとめをし，次時の課題をつかむ。	●次時への学習意欲を高める。

（3）評価及び指導の例

		３　　年	４　　年
イ	「十分に満足できる」と判断される状況	一，十，百，千が繰り返されることに目を向けて，数のよみ方を考えることができる。	省く印を使うと，変わり方の様子がよく分かることに気づき，折れ線グラフを読み取ることができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	４けたずつで数を区切ってよむように，数字の間に線を引くようにさせる。	線の傾きに着目させ，変わり方の様子を読み取るようにさせる。
ウ	「十分に満足できる」と判断される状況	数の仕組みを用いて，千万の位までの数のよみ方，かき方を理解することができる。	省く印を使って，変わり方の様子よく分かる折れ線グラフをかくことができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	上の位から一万の位までをまずかき，その後の数を４けたでかくようにさせる。	省く範囲をどこからどこまでにすればよいかを考えさせ，折れ線グラフをかくようにさせる。

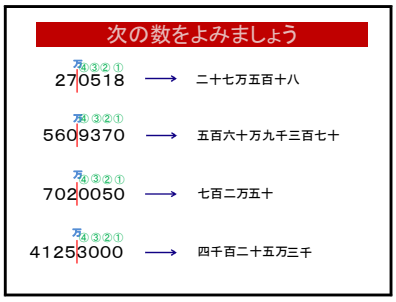
３年「一億までの数」で使用するスライド



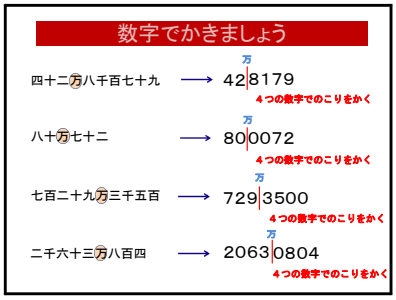


このスライドを導入で使うことにより，一万の位よりも大きな数が出てきたことに着目させ，よみ方を考えさせる。
ワークシートに自分の考えをまとめさせる。

この３つのスライドで，十万の位から千万の位までの数の仕組みを理解させる。

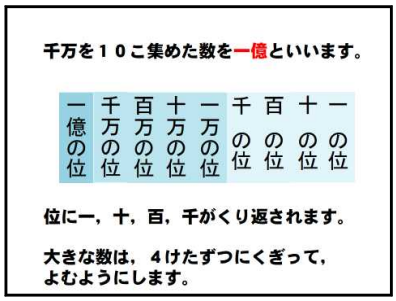


このスライドは，クリックを続けることにより，千万の位までの数のよみ方を理解できるように作成している。
下４桁から上に「万」を付けてよむことを視覚的に確認することができる。
パソコン操作は「リーダー」に任せる。



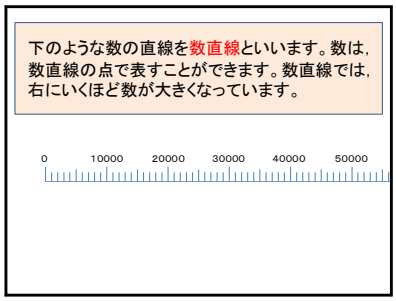
このスライドは，千万の位までの数のかき方を理解できるように作成している。「万」より下の数を４桁でかくことを視覚的に確認することができる。
ここでも，パソコン操作は「リーダー」に任せる。

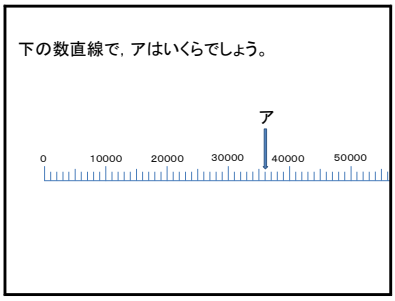
ここからは，本時以降で使用するスライドをいくつか紹介する

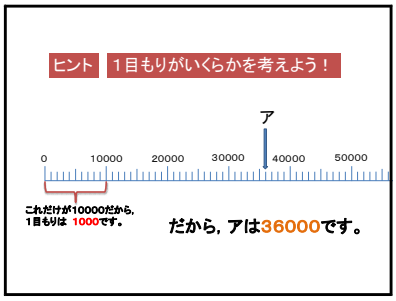


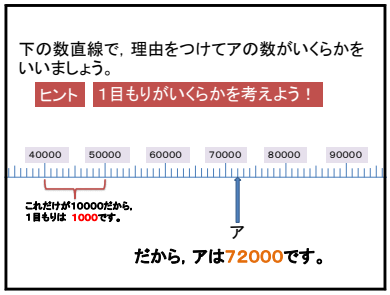
このスライドは，一億の位までの数の仕組みを理解させるために使用する。４桁ずつに数が区切られることを視覚的に捉えさせたい。

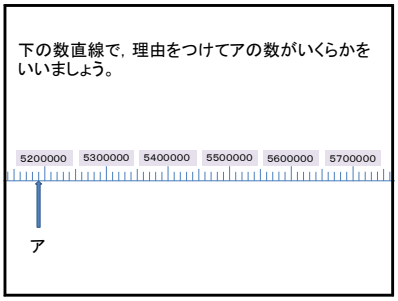
下のスライドは，数直線から数をよみとるためのものである。一目もりがいくらを。表しているか考えさせるように作成している。

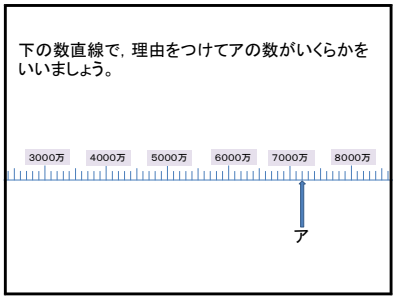




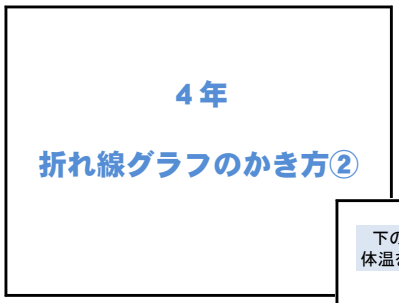


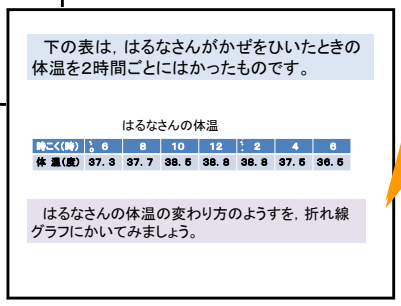




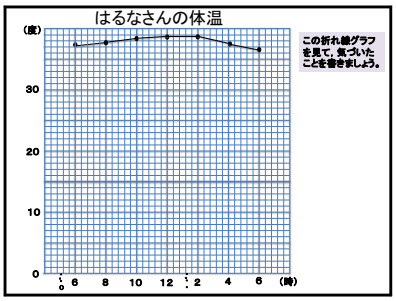


４年「折れ線グラフ」で使用するスライド

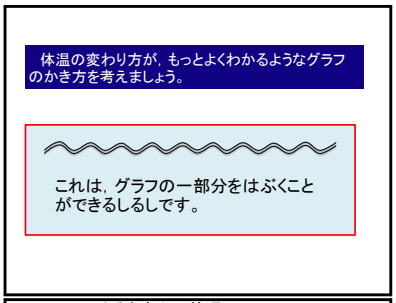




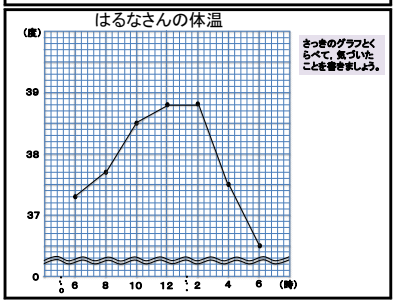
このスライドを導入で使い，ワークシートのグラフ用紙に，前時の復習をかねて折れ線グラフをかかせる。



自分がかいたグラフが間違いないかを，このスライドと比べて確認させる。
また，このグラフを見て気づいたことを書かせ，話し合わせる。



このスライドで一部分を省くことができる印を示し，使い方を理解させる。



自分がかいたグラフが間違いないかを，このスライドと比べて確認させる。
また，このグラフを見て気づいたことを書かせ，話し合わせる。変化の様子がはっきりすることを，読み取らせたい。

３年生は，一万の位よりもより大きな数を考えること（課題把握・課題追求）から，４年生は，前時の学習をもとに変化の少ない折れ線グラフをかくこと（適応発展）から，授業を始める。

３年生は，ワークシートで考え話し合った後，千万の位まで数読むことを定着させる。そのために，下から４けたで区切って，そこから上に「万」をつけて読むことを，視覚で捉えて理解することができるできるスライドを用意する。

４年生は，自分のかいた折れ線グラフを確認することと「省く印」を理解することのためにパソコンを利用する。また，変化の様子を可視化し，共通理解して話し合うためにも，グラフをパソコンでモニターに映すようにする。

イ　パターンＤの授業

次に，パターンＤのずらし授業を紹介する。単元は，３年生「三角形」，４年生「がい数とその計算」で授業展開を考えてみた。この時間は，３年生が発表を行う機会が多く，パソコンではなく実際に手作業で学習した方が理解が深まると考え，このパターンを採用する。

３年生は自らがストローで作った三角形の仲間分けを発表することから授業を始め，二等辺三角形・正三角形の定義の理解へと繋げていきたい。

４年生は，比較的難しい「がい数の表す範囲」の学習であるが，視覚的に捉えるスライドを用意することにより，共通認識の下に自分たちで話し合い活動や定着を図る活動を進めることができると考える。

第３・４学年（複式）算数科学習指導案

1　単元名

３　年　「三角形」　　４　年　「がい数とその計算」

2　単元の目標

３　　年	４　　年
二等辺三角形や正三角形について理解し，作図ができる。また，二等辺三角形や正三角形の角の大小・相等関係を確かめられる。	概数の意味を理解し，四捨五入によって概数を求めることができる。また，見積もりの必要性に気づき，和・差・積・商について，それぞれ概数で見積もることができる。

3　単元の評価基準

３　　年	４　　年
ア【関心・意欲・態度】 身近にある基本的な形（三角形）を分類しようとする。 イ【数学的な考え方】 辺の長さによって三角形を分類して考える。 定義をもとに，二等辺三角形や正三角形について説明できる。 ウ【技能】 コンパスを使って，二等辺三角形・正三角形をみつけたり，かいたりすることができる。 エ【知識・理解】 二等辺三角形・正三角形の定義や性質が理解できる。	ア【関心・意欲・態度】 日常生活で使われている概数を進んで調べ，目的に応じて概数で表したり，概算したりしようとする。 イ【数学的な考え方】 数のしくみに基づいて，概数の表し方を考えることができる。また，目的に応じた見積もりの仕方を工夫することができる。 ウ【技能】 四捨五入によって概数を求めることができる。また，加減の概算を正しく行うことができる。 エ【知識・理解】 概数の意味，四捨五入および概数の表し方が分かる。

4 指導計画

３　年　（全８時間）	評価内容	４　年　（全８時間）	評価内容
①二等辺三角形と正三角形の理解（２時間）〈本時２／２時間〉	ア・イ ウ	①概数の表し方の理解　（２時間）	ウ・エ
②二等辺三角形と正三角形の作図（１時間）	イ・ウ	②概数の表す範囲　（１時間）〈本時〉	イ・ウ
③円や色紙を使った三角形づくり（１時間）	イ・ウ	③概数を使って　（１時間）	ア・イ
④角の意味の理解と大小比較（２時間）	イ・ウ	④概数の計算　（３時間）	ウ
⑤三角形のしきつめ　（１時間）	ア・イ	⑤たしかめと復習　（１時間）	エ
⑥たしかめと復習　（１時間）	エ		

5　本時の学習

（1）目　標

３　　年	４　　年
二等辺三角形や正三角形の定義を理解し，三角形を弁別し，そのわけを言うことができる。（b）	四捨五入の意味にもとづいて，概数の表す範囲を考え，以上，未満，以下の用語を使って数の範囲を表すことができる。（b）

（2）展　開

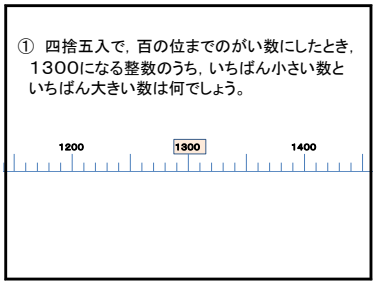
3　　年		わたり		4　　年	
指導・支援	主な学習活動			主な学習活動	指導・支援
●観点をはっきりさせて発表できるように助言する。	①自分で考えた分類の仕方を発表する。 画用紙・ストロー		10	①プリントで前時の復習をする。 プリント	●前時の学習を想起させながら，問題に取り組ませる。
●辺に色をつけて，辺の長さに着目させる。 ■（評価イ）	②ノートに，二等辺三角形と正三角形の定義をまとめ，発表する。	15		②本時の学習課題をつかみ，見通しを持つ。	●学習課題をモニターで提示する。 パソコン・モニター
●見た目だけの判断でなく，辺の長さを調べるよう助言する。	③本時の学習課題をつかみ，見通しを持つ。 ワークシート		25	③課題解決をする。	●数直線の図を用意し，思考の手助けとする。 パソコン・モニター
●二等辺三角形，正三角形のどの辺の長さに着目したらいいのかを考えさせる。	④課題解決をする。	30		④自分の考えを発表する。	●根拠をはっきりさせて発表できるように助言する。 ■（評価イ）
●どのようにして辺の長さを調べたのかを発表させる。	⑤自分が考えた方法を発表する。		35	⑤ノートに，以上・未満・以下の用語の意味をまとめ，発表する。	●未満と以下の用語の意味の違いに留意するように助言する。
●個人差に配慮しながら一人一人が自信を高められるように配慮する ■（評価ウ）	⑥練習問題をし，理解を深める。 プリント	42		⑥練習問題をし，理解を深める。 パソコン・モニター プリント	●個人差に配慮しながら一人ひとりが自信を高められるように配慮する。 ■（評価ウ）
●次時への学習意欲を高める。	⑦本時のまとめをし，次時の課題をつかむ。		45	⑦本時のまとめをし，次時の課題をつかむ。	●次時への学習意欲を高める。

（3）評価及び指導の例

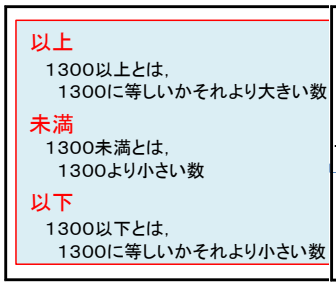
		3　　年	4　　年
イ	「十分に満足できる」と判断される状況	定義をもとに，二等辺三角形と正三角形について説明できる。	四捨五入で百の位までの概数にしたときの，いちばん小さい数，いちばん大きい数とその理由を説明することができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	辺に色をつけて図形を貼り，二等辺三角形と正三角形の定義をノートにまとめさせる。	数直線を使って調べさせ，四捨五入で百の位までの概数にしたときの，概数の表す範囲を考えさせる。
ウ	「十分に満足できる」と判断される状況	辺の長さに目をつけ，コンパスを用いて二等辺三角形，正三角形を弁別することができる。	「以上，未満，以下」の用語を正しく用いて，数の範囲を表すことができる。
	「おおむね満足できる」状況を実現させるための具体的な支援	二等辺三角形と正三角形を見出せるよう，正しいコンパスの使用方法に目を向けさせる。	日常の例を分かりやすく示して説明し，「以上，未満，以下」の用語の理解を促進する。

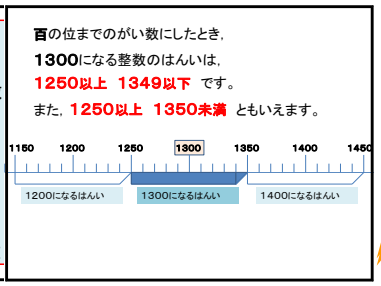
４年「がい数とその計算」で使用するスライド

このスライドを導入で使用し，百の位までのがい数にしたときに１３００になる整数のうち，いちばん小さい数といちばん大きい数を考えさせる。



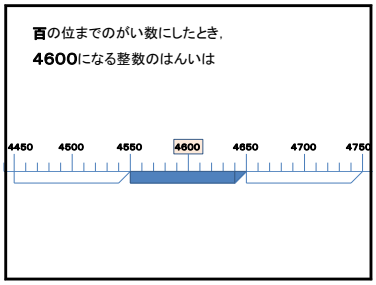
課題解決が困難な児童には，この数直線のスライドを見せ，思考の手助けとする。

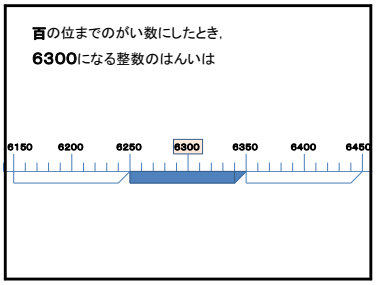


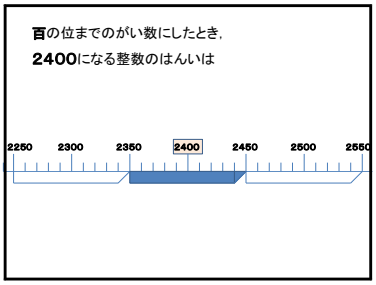


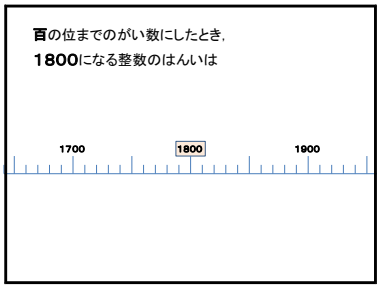
話し合いを行った後，この２つスライドで，「以上・未満・以下」の用語を示し，範囲をそれら３つの用語を使って表すことができることを理解させる。

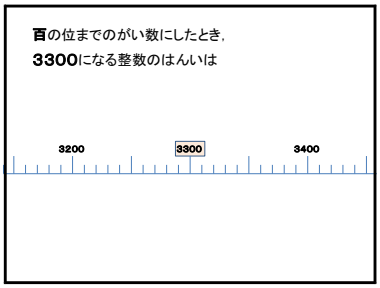
下のスライドは，がい数の表す範囲を「以上・未満・以下」の用語を使って説明するためのスライドである。児童が順に問題に答えていくようにする。途中から範囲の表示をなくし，より深い思考へと導いていく。

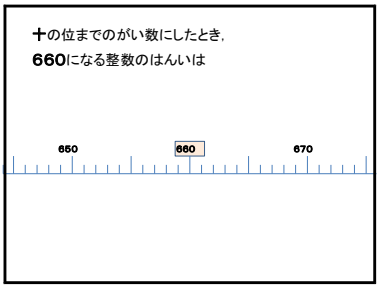












３年生は，前時に自分で分類した三角形の仲間分けを発表すること（課題追求）から，４年生は，「○の位まで」「上から○けた」の概数にする 復習のプリント（適応発展）から，授業を始める。

３年生は，二等辺三角形・正三角形の定義を理解した後，実際にものさしやコンパスを使って，二等辺三角形・正三角形を見分ける作業を行うことにより，三角形の定義について理解を深めたい。

４年生は，モニターに映し出した数直線上で，概数の表す範囲を考えることから。「以上・以下・未満」の言葉の意味を知り，それらの言葉を正しく使って概数の表す範囲を説明することにより，概数についての理解をより深めたい。

７　おわりに

算数科における「言語活動の充実」の場面を「子どもどうしが考えを交流するコミュニケーションの場」と捉え，問題解決学習において考えを練り合う場に焦点をあて，自分の考えを表現し伝え合う力を育てるための指導のあり方や子どもどうしのかかわらせ方の工夫，多様な考えの生かし方やまとめ方について，具体的な授業の場をイメージしながら研究を進めてきた。その際，パソコンを利用して可視化を図ることにより，お互いが多様な考えを自由に出し合って討議し，それぞれの考えを互いに尊重しながら関連づけ，発展的に考察するというコミュニケーション活動を円滑に進めることができると確信している。また，思考力・判断力・表現力等の育成にも大いに役立つと考える。

この他にも子どもどうしが考えを交流し，考えを深めていくコミュニケーションの場の工夫として学習形態の工夫が考えられる。例えば，ペア交流など小集団によるコミュニケーションの場をどのように効果的に取り入れればよいのか，どのように工夫すれば「リーダー学習」をより効率的・効果的に進めることができるかについても研究することが必要である。

また，本研究は，複式学習における間接指導の際の児童の主体的な学習への取り組みに絞っての研究であったが，算数科の言語活動の特徴である自分の考えを言葉，数や式，図や絵，表やグラフを用いて書いたり，式や図を読みとったりすることも大切な活動である。思考過程が分かるようなノート作りの継続的な指導なども併せて研究していく必要があると考える。

複式であれ，単式であれ，一人ひとりを生かす教育に変わりはない。大事なのは，その１時間で，その単元全体を通して，またその教科を通して，子どもにどんな力をつけていくかということである。複式学級だから課題が多いという発想ではなく，複式学級だからこのような良さがあるという発想で授業をつくっていくことは，子どもたちにとって大いに意義がある。これから，まだまだ追究すべきことはたくさんあるが，今後も子どもの視点に立った授業づくりについて研究を深めたい。

研究主題

ＩＣＴ活用の推進と情報モラル教育

三好教育研究所　研究員　岡本　博一

１　はじめに

昨年度，三好市・三好郡の小学校と中学校におけるＩＣＴ活用状況について三好地域の教職員を対象としたアンケート調査を実施し，その実態についてまとめた。その中で明らかになったことは次のようなことであった。

①小学校も中学校も90％前後の教員が授業でＩＣＴを活用することについて賛成
②小学校はＩＣＴ活用に反対は０％だったが中学校では反対が８％
③中学校より小学校の活用率が高いが機器によってその活用差が大きいものと小さいものがあり，接続などの手間やトラブルのない活用環境の整備が必要
④ＩＣＴ活用（デジタル）と読み書きなどの基本的な学習の仕方（アナログ）のバランスを考え，教科の目標にせまるための活用の仕方が大切
⑤情報モラル教育・メディアリテラシー教育も同時に行っていくことが必要　　など

以上のような調査結果を受け，今年度行った二つの取り組みについてまとめることとした。「実践Ⅰ」はＩＣＴ活用の推進を図るために「三好郡市中学校社会科部会で取り組んだ研修」について，「実践Ⅱ」は三好市内の小学校から依頼されて取り組んだ「情報モラル教育」についてである。この二つの取り組みを報告する。

２　研究の目的

三好地域は教育の情報化に早くから取り組んできた経緯があり，三好教育ネットワークセンターがその推進的役割を果たしていた。ネットワークセンターが閉所になった現在でも学校現場の教員や三好教育会の組織を中心に三好市・東みよし町教育委員会の理解と支援もあり，授業での活用はもとよりグループウェアの導入や校務支援に至るまでその推進が図られている。

しかし，小学校でのＩＣＴ活用に比べて，中学校ではその活用率が低いのではないかという声もあった。そこで，昨年度のアンケート調査をふまえ，中学校でのＩＣＴ活用推進のきっかけづくりを目的として社会科部会ＩＣＴ活用研修を計画・実施した。

一方でゲーム機でインターネットができる現代，パソコンやタブレット端末，スマートフォンなどの新しい通信技術の進歩とともにネット依存と言われる問題やネットいじめ等，学校現場では新たな生徒指導の問題が起こっている。私たち教員はＩＣＴを活用すること，させることと同時にその使い方やマナーについても児童生徒，あるいは保護者に対しても教育・啓発をしていく必要がある。そのためには，教員もＩＣＴについて幅広く積極的に学んでかなくてはならない。要するに私たち教員も情報モラルに関する意識を高めていかなくてはいけないということである。そして情報モラル教育については早い段階から取り組んでいく必要があると考える。その際どのような資料を使い，どのような取り組みができるか思案してみた。

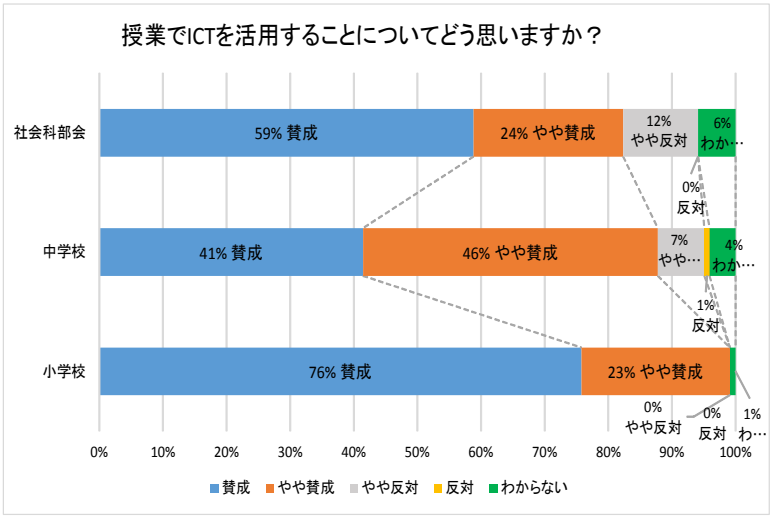
3　実践について

【実践Ⅰ】ＩＣＴを活用した社会科の授業を考える

――「チョーク」と「トーク」だけの授業からの脱却をめざして――

（１）三好郡市小・中学校と中学校社会科部会部員におけるＩＣＴ活用状況について

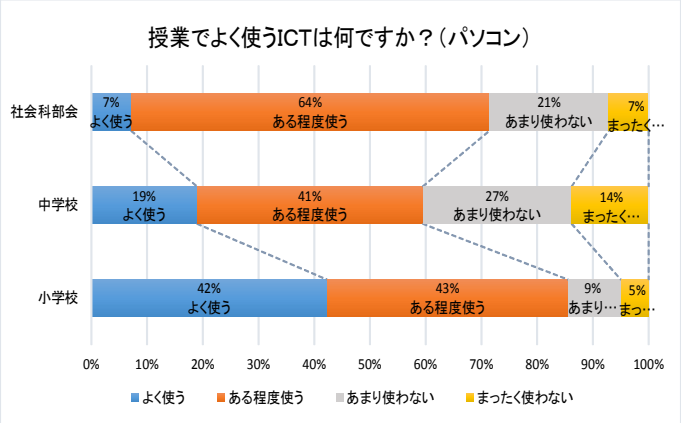
例年，三好郡市中学校社会科部会では授業研究会を行ってきた。しかし，近年若手教員が少なくなり毎年同じ教員が研究授業を行っているという現状があった。そこで今年度はＩＣＴを活用した社会科学習について研修を計画し，４月の総合研修部会で提案し，この研修会を実施する運びとなった。



右のグラフは昨年度実施した「ＩＣＴ活用状況アンケート調査」である。社会科部会の教員から得た回答を集計してみた。授業でＩＣＴを活用することについて「賛成・やや賛成」は小学校99％，中学校87％，中学校社会科部員は83％であった。「反対・やや反対」は小学校は０％だったが，中学校８％，社会科部員は12％が「やや反対」と答えている。小学校の反対意見０％に対して，20名足らずの社会科部会部員の中の反対意見ということを考えると大きい数字と言えるかもしれない。中学校の反対意見の背景には「ＩＣＴばかりに頼っていては本当の学習にはならない」という考えや「読み・書き」等を重視する考えがあることが自由記述の意見から読み取ることができた。

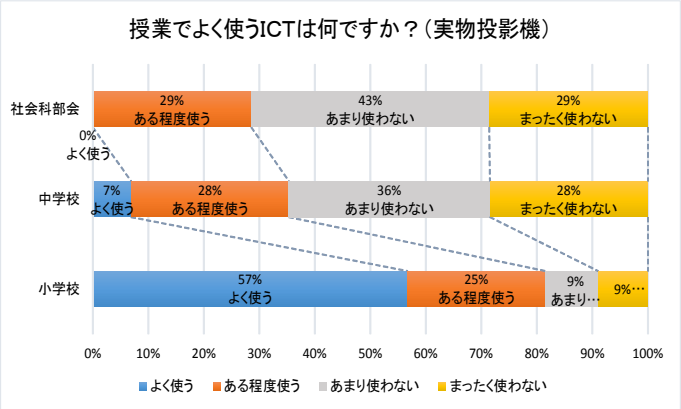
ＩＣＴ活用は学習内容を生徒に理解させるためのツールであってそれを使うことが目的ではない。ＩＣＴを活用して生徒にとって「わかる授業」が展開できればいい。そして，その目的はあくまでも学習内容を理解させるもの，学習目標を達成するための活用でなくてはならない。教員間でそういうことを共通理解しながらこの研修を計画・実施した。

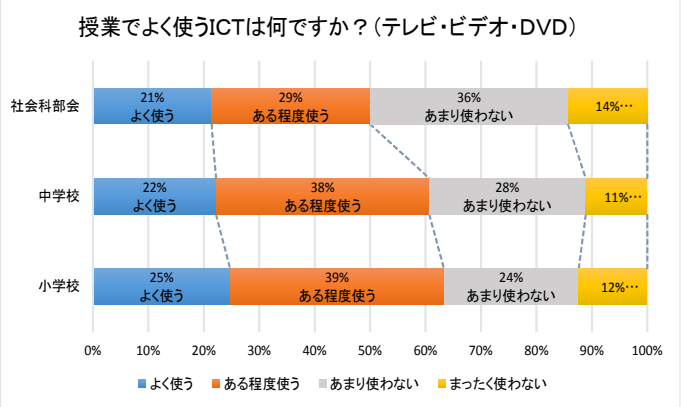
その他の主な問に対する社会科部員のアンケート結果は次のようになっている。まず「授業でよく使うＩＣＴは何ですか」という問の「パソコン」については，「よく使う・ある程度使う」は中学校60％，小学校85％で小学校に比べると低いかもしれないが６割の教員が授業で使っていることになり，それほど低い数値とは言えない。社会科部員も「よく使う」７％，「ある程度使う」64％で71％となり，わりと使っていると考えてよいが「よく使う」という回答に限ってみれば小学校の42％に比べると低いと言える。



次の実物投影機（書画カメラ）となると中学校と小学校ではその活用差が非常に大きいこ

とがわかる。「よく使う・ある程度使う」が中学校35%に対して小学校は82%となっている。しかも小学校は「よく使う」という教員が57%と半数以上で中学校の７%が際だって低いことがわかった。社会科部員にあっては「よく使う」０%，「ある程度使う」が29%で中学校全体の結果よりも低くなっている。





活用にあまり差がない機器もある。それは「テレビ・ビデオ・ＤＶＤ」である。社会科部員・中学校・小学校で50%～60%あまりの教員が「よく使う・ある程度使う」と答えている。教材ソフトが充実していることやスイッチをオンにすればすぐに使えるという環境から使い勝手がいいということが活用率に現れていると言える。

（２）協働学習支援ソフト『コラボノート』の活用

①研修の目的

今回の研修の目的は中学校でのＩＣＴ活用を今以上に推進していくということを意図しただけではない。大切なことは「ＩＣＴを活用した効果的な社会科の授業や学習を考える」という視点を忘れてはいけないということだった。そこで社会科の授業だけに限定せず，他の教科でも使えそうなもので，小学校でよく活用されている『コラボノート』というソフトについての研修を計画した。それは三好地域の中学校にもコンピュータ室には導入されていたが，あまり活用されていないという現状があったことと東みよし町の足代小学校が総務省のフューチャースクール推進事業の研究指定を受けて行われた社会科の研究授業で使われていたことにヒントを得たことがきっかけとなった。

研修の様子（池田中学校PC室）

『コラボノート』はジェイアール四国コミュニケーションウェアの協働学習支援ソフトで，ワードやエクセル，パワーポイントといったソフトとも互換性があるという特徴をもっており，三好地域以外でも県内外の教育委員会や学校現場で導入されているソフトである。

社会科の授業で複数班で調べ学習やまとめの学習をするとき，例えば班のメンバーの一人の生徒が模造紙に書く作業をしていると他のメンバーは作業ができずそれを横から見ているだけになったり中には遊びだしたりする生徒もでてくる。しかし『コラボノート』はパソコンを使って全員が同時進行で作業ができ，しかもそれを模造紙でいうならば一枚の紙面にま

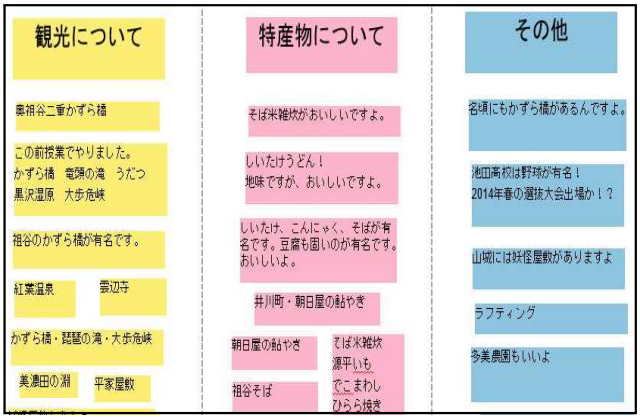
とめることができる。また，まとめたものをパワーポイント形式で保存できるので，そのまま新聞にして印刷したり発表に活用したりすることもできるという便利なソフトである。

②研修内容について

研　　修　　内　　容	担　当
進行・日程説明	事務局
1　三好地域の小中学校におけるＩＣＴ活用状況について	岡本（研究所）
2　『コラボノート』を使って自己紹介	講師：藤沢宏茂氏 （ジェイアール四国コミュニケーションウェア）
3　三好地域紹介～付箋機能の使い方をマスターする	
4　ワークショップ・・・４班で活動	
(1)　付箋機能を活用した授業場面の想定	
(2)　教科・単元・活用内容・期待される効果について	
(3)　活用場面について各班の発表	
5　意見交換（質疑・応答）	事務局

研修では，まず最初に三好地域の学校現場のＩＣＴ活用状況を知ってもらうべくアンケート結果の報告を行った。その際，三好郡市の中学校社会科部会部員のアンケート集計も含めて提示した。そして小学校と中学校のＩＣＴ活用の差を認識してもらい課題意識を持ってもらった上で研修に臨んだ。

研修は『コラボノート』というソフトに慣れてもらうため講師（藤沢氏）に先生役，社会科部会部員の教員には生徒役として参加してもらった。『コラボノート』を使い自己紹介をしてもらった後，付箋機能を使い「三好地域紹介」と題して「黄色：観光，ピンク：特産物，青：その他」ということで思いつくまま付箋に記入してもらいコラボノートで作成した一枚のシート（パソコン）上にそれを添付していってもらった。



このソフトは Internet　Explorer などのブラウザで動作するという特徴があり，一つの画面に一斉に付箋を添付（書き込み）していくことができる。要するに，授業で使用するなら生徒全員の考えを集約して共通理解したり，思考力を深めていくことなどができるわけである。アナログ的に考えると付箋や色画用紙，小さいホワイトボードなどに自分が書いたこと（自分の考え・意見・調べたことなど）を模造紙や黒板に掲示していくと考えてもらえばよい。そして，それをパソコンの画面やスクリーンなどに大きく映し出し，全員で見て確認することができる。

続いて４つの班に分かれてのワークショップに取り組んだ。ワークショップ(1)は付箋機能を使っての授業やその機能を使えそうな場面の想定というものだった。次に示すとおり，考え出された活用場面は社会科の授業に限らず道徳・学活，総合的な学習の時間等多様であり，これだけたくさんのアイデア・場面が想定されるということが『コラボノート』というソフトが持っている可能性だと考える。

ワークショップ(1)付箋機能を活用した授業場面の想定

○社会科　価値判断を問う授業
　死刑制度は存続すべきかどうか　　夫婦別姓は実現可能か
　中国四国連絡橋が開通して良くなったこと悪くなったこと
　日本のエネルギー政策の是非（再生可能エネルギーか原子力発電か）
　承久の乱あなたは朝廷派？幕府派？

○社会科　思考力や表現力を養う授業
　資料・グラフの読み取り　歴史新聞づくり
　地方自治で条例を考えさせるとき
　教科書の絵や写真を見て気がついたことを出すとき

○道徳・学活
　気持ちの揺れ具合を縦・横軸で理由とともに提示させるとき
　赤ちゃんポストに賛成か反対か意見を問う場面
　学級目標を決めるとき

○総合的な学習の時間
　職場体験のまとめの新聞づくり
　ＫＪ法で意見や考えを出すとき

さらにワークショップ(2)では単元を絞り込み，その活用内容や期待される効果等につて考えるという作業を行った。各班で考えた授業案は次のとおりである。

ワークショップ(2)教科・単元・活用内容・期待される効果について

１班
○教科　社会科（公民的分野）
○単元　私たちが生きる現代社会
○活用内容
・婚外子に対する遺産相続に関して民法が改正されるということについてどう思うか。賛成か反対か，立場と理由付けをしなさい。

２班
○教科　社会科（歴史的分野）
○単元　承久の乱と武家政治の広まり
○活用内容
・幕府側と朝廷側のシートを作成。
・自分の立場を明らかにし，あてはまるシートに選んだ理由を付箋で書き込む。
・話し合いどちら側につくかの判断。

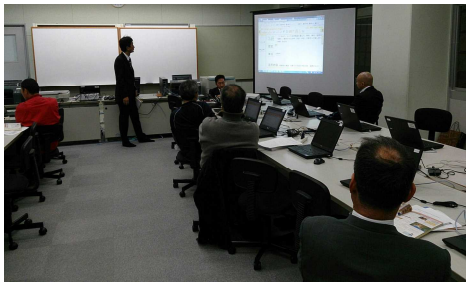
３班
○教科　社会科（歴史的分野）
○単元　元軍の襲来
○活用内容
・授業の導入とまとめで活用
・蒙古襲来図を見て各自わかること，気がついたことを発表する。
・竹崎季長が戦いに参加した理由を考える。

４班
○教科　社会科（公民的分野）
○単元　地方自治の課題
○活用内容
・地域の課題を調べそれを解決する手だてを多方面から考える。
・自然環境・産業・福祉・教育など視点ごとに付箋を使い分け示す。

○期待される効果について
・授業活動にスムーズに入れる。導入時間が短縮できる。
・気がつかなかった意見を見たり聞いたりすることにより，視野が広がる。
・字という形に残るので，他人の意見を参考にしやすい。
・すべての生徒の意見を短時間に理解できる。
・視覚に訴えることで違いに気づきやすい。
・発表することが苦手な生徒も書くことで，多くの意見が出てくる可能性がある。
・生徒が苦手なディベートの形を簡単に作ることができる。
・反論に必要な資料や写真をネットから取り出し，すぐに提示することができる。

③研修後の感想

研修後の感想を見てみると「使ってみたい」と感じた教員が多くいたことがうかがえた。その一方で「使ってはみたいが，そのようなゆとりがない」という現状や「教室で使えるような環境整備が必要だ」という課題も明確になった。



活用場面について各班の発表

・使い方の工夫によっては，いろいろな場面に使うことができそうだと思いました。付箋をいろんな場所に貼り付けることができるのがいいと思います。

・付箋機能など同時進行できる長所がある。大勢の意見を色分け付箋により瞬時に見やすく並べ替えることができ，整理するのに便利。

・コラボノートの存在を初めて知りました。書き込みが一度にできるというのはとても便利で，確かに社会科に限らず，幅広く活用できると思いました。これから，ぜひ授業で使えるように研究していきたいと思いました。

・利用の場面はたくさんあることがわかった。社会科はもちろん学級活動や総合的な学習，そして何かの課題に対しての全校生徒の意見を集約することができる気がする。

・可能性を感じるソフトであると思いました。活用のイメージもわいています。しかし，いかんせん時間が足りず活用しきれないのが実情です。

・社会科も社会科教室があって，常時ＰＣが使えるとこのソフトも活用できると思います。学校の環境整備とソフトの充実，使用活用は車の両輪だと思いました。

（３）実践Ｉのまとめ

今回，このような研修会を計画できたのは，研究員という立場で小学校情報教育部会の活動や小学校の授業を見られる機会に恵まれたという背景がある。中学校現場しか知らない自分にとってそれはとても良い刺激になった。

講師の藤沢氏から「授業の本質がわかっているベテランの先生にこそ，ＩＣＴを使ってほしい」という話があった。授業の本質がわかっている経験豊富な教師が使うことによってその授業がよりいっそう良質なものになるということである。

先にも述べたがＩＣＴを使うことが目的ではない。ＩＣＴはただのツールである。そのツールを「いつ・どこで・どのように」活用すれば生徒にとって「わかる授業・面白い授業」が展開できるのかということが大切なのである。「チョーク」と「トーク」だけの授業からの脱却をめざし，これからも多様な研修に取り組んでいきたい。

研修計画に賛同し，協力をいただいた三好郡市中学校社会科部会の先生方，会場を提供していただいた池田中学校，また，研修の講師を快く引き受けていただいた株式会社ジェイアール四国コミュニケーションウェアの藤沢宏茂氏に感謝申し上げます。

【実践２】情報モラル教育について

――「グレゴリーへの手紙」から見えてくる情報モラル教育――

（１）阿波池田ロータリークラブと小学校からの講演依頼を受けて

平成25年7月以降，三好教育研究所に阿波池田ロータリークラブと三好市内の小学校から次ような依頼を受けた。阿波池田ロータリークラブからは「今の学校教育や学校現場のことなどの話をしてほしい」という依頼。小学校からは「情報モラルについて子どもたちと保護者向けに話をしてほしい」という依頼である。そこで，この機会は自分の研究を深めることができるととらえ，両方とも情報モラル教育に関することに題材をしぼり，次のようなテーマで話をすることにした。

○阿波池田ロータリークラブ例会

情報モラル教育１　子どもと携帯電話・スマホをめぐる問題

情報モラル教育２　子どもに携帯電話・スマホを持たせるときは・・・！

○小学校

インターネットモラルについて

～インターネットや携帯電話・スマホの正しい使い方・上手なつきあい方～

（２）情報モラル教育の必要性

携帯電話，とくにスマートフォンが普及してきている現在，「ライン外し」と呼ばれるネットいじめなど，子どもを取り巻くインターネット環境は次々と新しい問題を生み出している。テレビのニュースや番組でもネット依存等の問題がたびたび取り上げられており，深刻な状況が伝えられている。

インターネット環境の整備が進み，携帯電話やスマートフォンだけでなく，タブレット端末やゲーム機，携帯型の音楽プレーヤーなどインターネットを利用できる機能が備わった機器が次々と生産・商品化されている。いつでもどこでも，そしてだれとでもネットでつながることができる便利な時代と言われているが，それに対してのルール作りは後手に回っており，対策が追いついていないのが現状である。昨年度実施した「ＩＣＴ活用状況アンケート調査」でも「情報モラル教育も大切だ」という内容の意見もたくさんあり，それについてはわりと早い段階から取り組んでいく必要があると考える。

平成25年3月に内閣府が出した『平成24年度青少年のインターネット利用環境実態調査調査結果（概要）』によると，青少年の携帯電話所有率は平成24年では小学生が所有率27.5%，中学生51.6%，高校生98.1%と小学生でも３割近い子どもが携帯電話を持っているという結果が出ている。携帯電話を所有しているという児童生徒の中でスマートフォンを持っていると答えているものは，小学生では１割弱（7.6%），中学生では２割半ば（25.3%），高校生では５割半ば（55.9%）となっている。この数値がこれからも高くなってくるということは容易に予想できる。そして携帯電話を使ったインターネット利用状況は常態化しており，小学生では約４割，中学生では７割半ば，高校生の９割半ばがインターネットを利用している。利用内容はメールやゲーム，調べものが上位を占めているという結果が出ており，インターネット上のトラブルなどの経験となるとやはりメール関連が約５割という結果が出ている。

このような時代だからこそ，情報モラル教育が重要であり，早い段階から取り組まなくてはならないが，そのためにはどのような方法や資料・教材があるのだろうか。

（３）手紙を題材として

①グレゴリーへの手紙

(2)で述べたような状況の中，子どもに携帯電話（スマートフォン含）を持たせたくないと考えていても，安心・安全という防犯的なことを考慮して携帯電話を持たせているという保護者も多いのではないだろうか。実は我が家も防犯的なことを考慮して子ども用の携帯電話を購入したという家の一つである。

では子どもに携帯電話を持たせるときに大人（保護者）としてどうするべきか。そのヒントが「グレゴリーへの手紙」には書かれている。この手紙はテレビ番組などでも放送され，日本でも話題になったアメリカのある親子の話である。母親はクリスマスプレゼントとして息子のグレゴリー君にスマートフォンを贈った。そのプレゼントには次のような手紙がそえられていた。

グレゴリーへ

メリークリスマス！あなたは今日からiPhoneを持つことができます。

やったね！あなたは責任感のある利口な13歳なので、このプレゼントはあなたにふさわしいと思います。しかし、このプレゼントを受け取ったからにはそれなりの約束を守ってもらいます。

以下の約束を読んでおいてください。私の親としての仕事も分かって欲しい。あなたを健康で豊かな人間性を持った、現代のテクノロジーをうまく活用していける大人に育てなければならないということを。

これら18個のことが守れないようならすぐにiPhoneをとりあげますよ。

あなたのことを本当に愛しています。これからあなたと数千のメールをやり取りすることを楽しみにしています。

1.これは私のiPhoneです。私が買って、あなたに貸してあげています。私ってやさしいでしょ？

2.パスワードは常に私に報告してください。

3.これは電話です。鳴ったらマナーを守って必ずでて下さい。それがママかパパだったら絶対に出ること。

4.学校のある日は午後7:30に、休日は午後9:00にママかパパにiPhoneを渡しなさい。次の朝7:30までシャットダウンしておきます。友達の親が直接出る固定電話に電話出来ないような相手ならその人には電話もSMS(メール)もしないこと。自分の直感を信じて、他の家族も尊重しなさい。

5.スマホを学校に持って行ってはいけません。メールでやり取りする相手とは直接会話を楽しみなさい。会話は生きる上で大事なスキルです。

6.もしトイレに落として水没させたり、地面に落として破損、紛失した場合は、修理費用は自己負担です。庭の芝刈りや赤ちゃんの世話、誕生日のお小遣いでカバーしてください。

7.このテクノロジーを使って嘘をついたり、人を馬鹿にしてはいけません。ネットいじめに関わるようなこともしてはいけません。人のためになることを第一に考え、喧嘩に参加しないこと。

8.人に面と向かって言えないことを、この携帯を使いメールで言わないでください。

9.友達の両親の前で言えないようなことをメールでしないこと。自己規制してください。

10.ポルノは禁止です。私と共有出来るような情報をネットで調べてください。もしわからないことがあるようなら、誰か人にきくようにしなさい。なるべく私かお父さんに聞いてね。

11.公共の場では電源を切るか、マナーモードにしなさい。特にレストラン、映画館など他の人としゃべっているときは気をつけなさい。あなたはだらしない人ではありません。スマホがそれを変えるようなことがあってはいけません。

12.あなたや他人のプライベートな写真を送ったり受け取ったりしてはいけません。バカにしてもだめです。あなたは

賢いですが、そういうことがしたくなる時期がやってきます。それはとってもリスクが大きく、学校生活だけでなく人生さえも壊してしまう可能性があります。サイバースペース（インターネット）はあなたより巨大で強力です。一度広まってしまったら、解決するのはとっても難しいです。

13.膨大な数の写真やビデオを撮らないでください。すべてを記録する必要はありません。経験を大切にしてください。全てはあなたの記憶に残ることでしょう。

14.ときにはiPhoneを家に置いて行きなさい。iPhoneは生きものじゃないしあなたの一部でもありません。携帯なしで生活することを覚えてください。携帯を失うことを怖がるようなネット依存症になってはいけません。流行に流されない、自分だけが取り残されていると思ってしまう不安感を気にしない、器の大きな人になってください。

15.友達が聴いているような平凡な音楽ではなく、クラシックや前衛的な音楽をダウンロードして聴いてください。現在は昔と比べ音楽を簡単にダウンロードしたり聴けるようになりました。この環境を活用してあなたの視野を広げてください。

16.ときどき、ワードゲームや難しいパズルを解いて、脳をきたえなさい。

17.あなたの周りで起きることをよく見てください。窓の外を見て鳥の声を聞いて、散歩に出かけ、知らない人とも話すようにしなさい。グーグルに頼らないで探し求めなさい。グーグル検索なしで考えてみてください。

18.問題があるようなら、iPhoneを没収します。そして一緒にそのことについて話し合います。またやり直しましょう。あなたと私はいつも何かを学んでいる。私はあなたのチームメイトです。一緒に答えを出して行きましょう。

これらの約束を守ってくれることを願っています。これらはiPhoneだけでなく、人生にも通じることです。あなたは激しく変わり続ける世界のなかで成長していきます。
刺激的で魅力的な世界です。できるだけシンプルに物事を考えていってください。
自分自身の力強く大きな意思や心を信じて、機械やガジェットなんかに負けないでね。
あなたを愛しています。iPhoneを楽しんでね。

メリークリスマス！お母さんより

心が洗われるような内容であり親としての愛情があふれた手紙である。保護者としての立場で書かれた手紙だが，情報モラル教育を行う上で大切なことが綴られている。この手紙をまとめの資料として使用し，次のような展開で話をした。

②展開

	内　　容	資　料
導入 （5分）	○インターネットの利用で何が起きているの！？ ・オンラインゲームの利用でトラブルが！ ・ゲームをやりすぎると？	
展開Ⅰ （20分）	○ネット依存について ・ネット依存度をチェックしよう ・ゲーム依存度をチェックしよう ・ネット依存について（ニュース番組視聴） ・ネット依存とは（まとめ）	 プリント プリント ＶＴＲ

展開Ⅱ （20分）	○インターネットの利用でおこっている人権問題 ・インターネットを利用した人権侵犯事件とその推移 ・インターネットによる人権侵害の例（中学校） ・インターネットの正しい利用の仕方について	
まとめ （15分）	○携帯電話を持たせるとき グレゴリーへの手紙～１８の約束	プリント

話の中で次のようなプリントを配布し，児童や保護者が分かりやすいように自分のネット依存度をチェックしてもらった。また，ゲームのしすぎも心配しているということだったので「インターネット」というところを「ゲーム」という言葉に置き換えてもらいチェックしてもらうということも行った。ネット依存度チェックではこの８項目のうち５項目に○がつくと依存の傾向があるとされている。

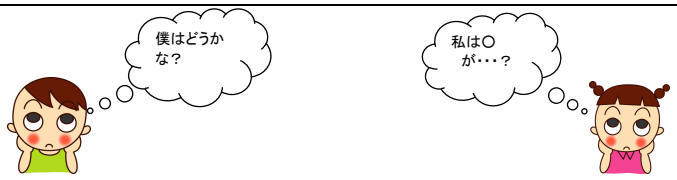
ネット依存度チェック！　　○○小学校 Ver.

１　あてはまるものに○をしてみましょう。

①	インターネットに夢中になっていると感じる	
②	満足を得るためにインターネット利用時間が長くなった	
③	インターネットの使用時間を短くしたりやめようとしたりしたがうまくいかない	
④	インターネットをやめようとするとイライラする	
⑤	はじめに意図したよりも長い時間オンライン状態になっている	
⑥	インターネットで人間関係や学校のことを台なしにした	
⑦	インターネットに熱中しすぎをかくすために家族などにうそをつく	
⑧	問題やいやな気持ちから逃げるためにインターネットを利用する	

２　「インターネット」というところを（　　）にしてみよう。

①	（　　）に夢中になっていると感じる	
②	満足を得るために（　　）利用時間が長くなった	
③	（　　）の使用時間を短くしたりやめようとしたりしたがうまくいかない	
④	（　　）をやめようとするとイライラする	
⑤	はじめに意図したよりも長い時間（　　）をしてしまっている	
⑥	（　　）で人間関係や学校のことを台なしにした	
⑦	（　　）に熱中しすぎをかくすために家族などにうそをつく	
⑧	問題やいやな気持ちから逃げるために（　　）を利用する	



※１は2013年10月23日放送 NHK「あさイチ」ホームページ
「どう向き合う？子どものネット依存」参照
http://www1. nhk. or. jp/asaichi/2013/10/23/01. html

ネット依存度をチェックするテストは，アメリカのキンバリー・ヤング博士によって開発されてもので，原盤は20項目からなっている。もう少し詳しいネット依存度をチェックするスクリーニングテストがネット依存外来のある「独立行政法人国立病院機構　久里浜医療センター」（神奈川県）のホームページ（http://www. kurihama-med. jp/tiar/tiar_07. html）に紹介されてるので参考にしてほしい。

プリント中の２では「インターネット」という語句を「ゲーム」に置き換えてチェックしてもらったが，この部分は〇がいくつあるからゲーム依存だというわけではない。子どもにゲームのやり過ぎではないかという危機感を持ってもらうために１のネット依存度チェックをアレンジしてみたものである。過去にはゲームは１日30分などと言われていたが，最近のゲームで30分で終われる内容のものはほとんどない。

インターネットにしてもスマートフォンやゲームにしても夢中になればなるほど会話をする時間や読書をする時間，学習時間など，多くの貴重な時間が奪われているということを忘れてはいけない。

③感想

・ネットのいじめを見てもぜったいにいっしょになって悪口を言わないようにする。ネットの中では，その時の気もちをすぐ書くと，すぐにいろいろな人につたわるのでこわいと思いました。それに人の悪口を書くと，自さつする子までいるというお話があったので，ネットの中でもぜったいに，悪口を書いたらいけないなあと，あらためてかんじました。とくに，だめなことをしたなあとかんじて，けそうとしても，けせないのがこわいなあとかんじました。（児童）

・思ったことは，「ゲームに夢中になっている」これをどうにかしたいです。せめて２時間にして，死亡や病気をさけたいです。生活の中で生かしていきたいことは，オンラインゲームなどを，ぶっとおしでしないことです。理由は，死んでしまうのがおそろしいのと，ゲームのやりすぎもよくないと思っているからです。オンラインゲームは，できるだけしません。（児童）

・スマホ・ケータイ・オンラインゲームについてを学習しました。スマホやケータイをずっとし続けると，ケータイやスマホを持っていないと落ち着かない病気になるので，こわいなと思いました。悪いメールを見て「そうそう」とあいづちをうつだけで罪人になってしまうので，もしもケータイを買った時はしないようにしようと思います。外国の男の子のグレゴリーのお母さんは１８条のスマートフォンのきまりを作ったので，すごいなあと思いました。当てはまる丸つけで，３つ当てはまり少なめだったのでうれしかったです。（児童）

・気をつけているつもりでも，依存症チェックであてはまる項目があり，子どもに注意するだけでなく，自分をかえりみるよい機会となりました。モラルや１８の約束については，口をすっぱくして言っているので，この講演で少しはその意味を理解してくれたのではないかと期待しています。近いうちに親子でノーメディアの日を過ごしてみたいです。（保護者）

・スマホでよく，ゲームをしたり YouTube を見たりしています。外で遊んでいる方だとは思いますが，やはりスマホの時間も長くなってきたかなと思います。お金などは，上の子供達から聞いているので，勝手に使用することはありません。便利なことも沢山ありますが，怖いことも沢山あるので子供にもきちんと伝えたいと思います。大人たちも，いつでもどこでもスマホ。我が家は食事中は“禁”です。大人も気をつけなければいけない事もあると思いました。（保護者）

・インターネットによる依存症は知っていたが，死亡者がいるのには驚きました。我が家でも長女に携帯を持たせているが，もちろんフィルタリングをかけ，ルールを作っているけど，日常のコミュニケーション等日々のチェックが必要だと感じました。（保護者）

（４）実践Ⅱのまとめ

阿波池田ロータリークラブと小学校からの依頼を受けたことがきっかけでネット依存の問題等，これから学校が取り組んでいくべき情報モラル教育のヒントを得ることができた。三好地域の学校現場ではもうすでに「ネット安心講座」などに取り組んでいるところもある。私自身，今のインターネットの世界は無法地帯だと感じている。使い方やマナーを間違えなければインターネットは便利なものだが，やはり正しい判断力をもった上でネット利用をしなくてはいけない時代である。子どもたちにはその判断力を育てながら正しいネット利用の仕方を教えていかなくてはいけない。そのためには私たち教員のメディアリテラシーを高めていくことが重要であり，保護者や地域，関係諸機関との協力・連携が不可欠である。

今回，貴重な時間をいただいた阿波池田ロータリークラブ関係者の方々，また，真剣に話を聞いていただき，感想までいただいた小学校の子どもたちと保護者の皆様，教職員の皆様に感謝申し上げます。

４　おわりに

脚本家の倉本聰が書いた詩に「若者」という詩がある。その詩を現代風にアレンジしてみた。

若者

ゲームに夢中になっている若者がいる
ゲームでしか遊ばない若者がいる
ゲームばかりしていてはいけないと
　思っている若者がいる
インターネットばかりしている若者がいる
インターネットに頼っている若者がいる
インターネットで検索すれば
　何でもわかると思っている若者がいる
スマホばかり見ている若者がいる
スマホで会話ができると思っている若者がいる
スマホがないと不安になる若者がいる
ネットで傷つく若者がいる
ネットで誰かを傷つける若者がいる
ネットで買い物をする若者がいる
ネットでものを売る若者がいる
ネットの便利さを知っている若者がいる
ネットの怖さを知っている若者がいる
ネットの怖さを知らない若者がいる
そんな若者の
せめて何人かに
今この俺の
してやれることは何か

原詩『谷は眠っていた―富良野塾の記録―』
倉本聰　著

ＩＣＴを活用するとき，大切なことはその目的である。授業の目的にそった活用ができるように心がけていきたい。そのためには試行錯誤が必要である。ＩＣＴは常に新しいものが出てくるのでそれを活用していくためには，やはり自己研修で覚えなくてはいけないこともたくさん出てくる。そこで尻込みするのではなく，無理のない範囲で挑戦していきたいと思う。

それと同時に，目の前の子どもたちには教えるべきことは，きちんと教えていかなくてはいけない。三好地域の学校から巣立っていく子どもたちが，正しいネット利用者として成長していってくれることを願い，これからの情報モラル教育に取り組んでいきたい。

〈参考資料・参考文献〉

『平成24年度青少年のインターネット利用環境実態調査調査結果（概要）』・・・平成25年3月　内閣府

『谷は眠っていた―富良野塾の記録―』・・・倉本聰　著

既刊『研究紀要』の内容一覧（過去10年）

集	年　度 （平成）	内　　容
45	16	ふるさとの歴史や自然，文化にふれる活動を通して，自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校　教諭　高岡　和恵 『地域から学ぶ「生きる力」の育成』　池田中学校 「みる力」を育てる美術教育　－美術の基礎・基本をみつめて－ 三好郡教育研究所　研究員　田口美千代 学校の情報化をどのように進めるか　三好郡教育研究所　研究員　生藤　元
46	17	幼稚園において，幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ， 幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第１ブロック三野町・三加茂町幼稚園研究グループ 地域や学校の特性を生かし，一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校　教諭　鶴田　美枝 地域や人に関わる体験的な活動を通して，自ら考える生徒の育成 三好中学校　教諭　野田　圭祐 三好郡小学校における情報教育の現状について　三好郡教育研究所　研究員　生藤　元 文字式の指導に関する研究 －１年文字式における生徒の理解の仕方について－　三好郡教育研究所　研究員　上田　美恵
47	18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 －主体的により良く伝え合う力の育成をめざして－　西井川小学校　教諭　丸本　豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 －共に生きる町づくりについて考えよう－　三加茂中学校　教諭　玉木　利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状　三好教育研究所　研究員　生藤　元
48	19	「健全な心身の成長をめざして」－高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながら－ 第２ブロック三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」 自らの食生活に関心を持ち，すすんで健康づくりに取り組む子どもの育成 －学校・家庭・地域の連携した取り組み－ 池田小学校　栄養教諭　大西　欣美 「確かな学力」を身につけさせるために －プレゼンテーション能力の育成とＩＣＴ機器の利用－　三野中学校　教諭　中川　悌二 「グラフを書くのは何のため？」－何でもかんでも「％」からの脱却で，知的な分析を－ 三好教育研究所　研究員　中川　斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 －子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えよう－ 三好教育研究所　研究員　西井　昌彦 「中学校理科におけるＩＣＴ機器の活用」 －評価活動におけるマークシートの利用－　三好教育研究所　研究員　山田　泰弘

集	年　度 （平成）	内　　容
49	20	ふるさとを愛し，ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 楜生小学校　教諭　谷川　智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 －『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心として－ 東祖谷中学校　教諭　髙﨑　英和 授業カイゼンとＩＣＴ活用　三好教育研究所　研究員　中川　斉史 体育科における効果的なＩＣＴ機器の活用について　三好教育研究所　研究員　西井　昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について　三好教育研究所　研究員　中川　斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 －構成的グループエンカウンターの考え方を生かして－ 三好教育研究所　研究員　石丸　秀樹
50	21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして －人やものとのかかわりを深め，豊かな感性や思考力の芽生えを育てる－ 山城幼稚園　教諭　山中あけみ 池田幼稚園　教諭　大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 －習得型学力から活用型学力へのステップ－　足代小学校　教諭　熊井　美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる　井川中学校　教諭　村上　郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 －小・中における英語教育の連携を目指して－　三好教育研究所　研究員　藤本　恒幸 授業におけるＩＣＴ活用の促進についての課題　三好教育研究所　研究員　福田　ミカ
51	22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 －人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求－　芝生小学校　教諭　小原　敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる　山城中学校　教諭　内田　清文 実物投影機の活用目的の明確化 －実物投影機利用意図の可視化を通して－　加茂小学校　教諭　福田　ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態　三好教育研究所　研究員　山西　敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 －三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より－ 三好教育研究所　研究員　山口　恭史
52	23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 －小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」－　大野幼稚園　教諭　谷本　紀子 地域から学び，ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 －学びを生かし，自らを表現できる佐野っ子をめざして－ 佐野小学校　教諭　山田　知弘 人や地域とつながり，協働できる生徒の育成 －「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして－ 西祖谷中学校　教諭　西岡ひとみ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ　三好教育研究所　研究員　山西　敏広 平成２３年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 －グループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業より－ 三好教育研究所　研究員　山口　恭史

集	年　度 （平成）	内　　容
53	24	家庭や地域，中学校との連携を密にした特色ある学校づくり 　－小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び－　　東祖谷小学校　教諭　森永　直美 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 　－ＥＳＤ（持続発展教育）の視点を取り入れて－　　池田中学校　教諭　丸岡　美枝 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 　－学級担任アンケート調査と研究授業より－　　昼間小学校　教諭　山口　恭史 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること 三好教育研究所　研究員　山下　達也 三好市・三好郡の小・中学校におけるＩＣＴ活用状況について 三好教育研究所　研究員　岡本　博一
54	25	豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 　－様々な体験活動を通じて， 　　地域の人々や同年齢，異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究－ 昼間幼稚園　教諭　佐藤　重美 地域とともにある学校をめざして 　－地域の教育力を生かして育てる三庄っ子－　　三庄小学校　教諭　三好美智代 生徒一人ひとりの思いが尊重され，つながりを大切にする活動を通して 三好中学校　教諭　近藤　　剛 複式学級における指導の充実を目指して　　三好教育研究所　研究員　赤堀　誠司 ＩＣＴ活用の推進と情報モラル教育　　三好教育研究所　研究員　岡本　博一